

ヤコブ 1 章 1 節～4 節から「試練の時の喜び」と題して 3 つの点でみことばを取り次ぎます。

1. キリストのしもべ 1

今日からヤコブの手紙の講解説教が始まります。ヤコブ、ペテロ、ヨハネ、ユダの 7 つの手紙は、公同の手紙と呼ばれます。それは、ヨハネ第 2 と第 3 以外は、特定の教会や個人に宛てた手紙ではなく、信者全般を対象としているからです。ヤコブの手紙の著者は、イエスの兄弟のヤコブです。ちなみにユダの手紙の著者ユダもイエスの兄弟です。イエスの兄弟と言っても、イエスは聖霊によってマリアに身ごもった神の子なので、他の兄弟とは違い、ヨセフが父ではありません。しかし、幼い時から一つ家で育ち、30 歳までイエスは父の大工仕事を引き継ぎ、ともに生活しました。そのような家族の一員であるイエスが、突然 30 歳になって家から出て行き、救い主としての働きを始めたので、兄弟たちはイエスを救い主とは信じませんでした。ヨハネ 7:5 には「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである」とあります。しかし、イエスの復活後、イエスの兄弟もイエスを神の子救い主と信じるようになりました。使徒 1:14 ではペンテコステの前に、「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた」とあります。

ヤコブについては、1 コリント 15:7 で「その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました」とあり、ヤコブがイエスを明確に信じた理由が、復活のイエスとお会いしたことにあることが分かります。ヤコブは復活のイエスとお会いしてイエスを信じ、ペンテコステの日に聖霊を受けて、エルサレムでイエスを証しし、やがてエルサレム教会の指導者となりました。使徒 15 章のエルサレム会議では主導的立場で会議を導き、異邦人クリスチャンは割礼を受ける必要はないとの結論に導きました。

ヤコブの手紙はクリスチャンにとっての行いの重要性を説いています。それは、信仰義認の教えを曲解し、クリスチャンは信仰さえあれば救われるので、行いは必要ないとの考えを持っていた人たちがいたからです。それに対して、ヤコブは行いのない信仰は死んでいると言い、本物の信仰は良い行いの実を必ず結ぶと教えました。しかし、ヤコブの手紙の行いの強調がルターによって誤解され、ルターはヤコブの手紙を「わらの手紙」と言って、この手紙の価値を低く評価しました。確かにルターは宗教改革の中で、行いではなく信仰による救いを伝えていたため、行いを強調するヤコブの手紙を十分理解できなかったのだと思います。けれども、ヤコブの手紙の行いの強調とパウロの手紙の信仰の強調は互いに矛盾するのではなく、互いに補い合うものなのです。そのことは今後、手紙本文の中でも見ていきたいと思います。

では 1 節を読みましょう。「神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、離散している 12 部族に挨拶を送ります。」ヤコブは自分のことをイエスの兄弟とは呼ばず、「神と主イエス・キリストのしもべヤコブ」と紹介します。しもべとはもとの意味は奴隷ですが、ここでは奴隷制度の奴隷の意味ではありません。ヤコブはイエスの救いをいただいた結果、神と主イエス・キリストのものとされ、その結果、神と主イエスに仕えるしもべであると言っているのです。ヤコブはここで共に育ったイエスを兄弟ではなく主と呼び、イエスを神と同等にしています。その信仰に立って、ヤコブは主のしもべとして喜んで教会に仕え、イエスの福音を伝えているのです。

手紙のあて先は「離散している 12 部族」です。離散という言葉はギリシャ語でディアスポラと言い、今日も海外に住む同胞のことをディアスポラと呼びます。ディアスポラ伝道は海外に住む邦人伝道のことです。新約聖書時代は、ユダヤ人はローマ帝国中に離散して生活していました。けれどもこの手紙のあて先は、離散しているユダヤ人のことではありません。そうではなく、ローマ帝国中に離散しているユダヤ人クリスチャンと、さらには霊的イスラエルである異邦人クリスチャンです。ユダヤ人クリスチャンはステパノの殉教から起こった激しい迫害により、帝国中に散らされ、その地で福音を伝えました。さらに異邦人クリスチャンも各地に散らされて伝道しました。ヤコブはエルサレム教会の指導者として、ローマ帝国中に散らばっている信者に向けてこの手紙を書きました。

私たちもヤコブと同じように、神と主イエス・キリストのしもべです。私たちは私たちが贖ってくださった主のものです。主のものとされたことを感謝し、神と主イエスのしもべとして生涯仕えていきましょう。そして、主のしもべとして、信仰に基づく行いの実を豊かに結ぶ人生を歩んでいきましょう。

2. 試練の時の喜び 2－3

2 節からいきなり本論に入っていきます。2 節「私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと慰めをください。」ヤコブは「わたしの兄弟たち」と親しく読者に呼びかけた後、試練について書きます。各地に離散しているクリスチャンは様々な試練を経験していました。迫害の試練、経済的試練、肉体的試練、精神的試練など、様々な試練を経験しながら信仰生活を送っていたのです。私たちも同じように様々な試練を経験しながら信仰生活を送っています。この世のご利益宗教は、信じれば苦しみがなくなると教えますが、聖書はそうは教えていません。イエスはヨハネ 16:33 で「世にあっては苦難があります」と言われました。しかしそこで終わらず「しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝

ちました」と言われました。ですから、クリスチャンになっても試練があるのです。しかも様々な試練に会います。長く生きていけばそれだけ、様々な試練に会うことでしょう。現在のコロナも世界中の人にとっての試練です。試練そのものを私たちは喜ぶことはできませんし、ヤコブもそのように教えてはいません。ヤコブが言っていることは、どんな試練の中でも、その試練には神の摂理があり、神の目的と意味があるので、そのことを信仰をもって受け止めて、喜びなさいと言っているのです。では試練の中にある神の目的とは何でしょうか。それは私たちの成長です。私たちがこの試練は、神が私たちを成長させるための神の訓練、神のトレーニングであると受け止め、試練の先にある成長に目を留めて、喜ぶのです。

そして、その成長の要素の一つが忍耐です。3節「あなた方が知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。」スーパーに行くと、小さい子供が何かを買ってほしいと泣いて母親に訴えている姿を見かけることがあります。子供は忍耐できず、泣いて訴えるのです。けれども成長していくと、そのようにはしません。買ってほしいものがあったとしても忍耐して次に進んで行くことができます。また、マラソン選手はスピードと忍耐力を養うために、毎日何十キロも走る苦しいトレーニングをします。その結果、試合の時には42.195キロを途中であきらめることなく、走り切ることができるのです。

信仰も同じです。試練にあうと私達の信仰が試され、訓練されます。その結果、忍耐が生まれるのです。しかもクリスチャンの忍耐は単なるがまんではありません。希望を土台とする忍耐です。Iテサロニケ1:3にある「私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐」です。どんな試練も私たちの成長のための神の訓練であると信じる信仰から来る望み、希望をクリスチャンは持つことができるのです。その望みの土台の上に忍耐が生まれるのです。試練に会えば会うほど、私たちは忍耐という実を結びます。ローマ5:3にあるように「苦難は忍耐を生み出す」のです。忍耐できる人は主にある望みを持つことができます。すると、その望みのゆえに、喜びを持つことができるのです。試練にあう時はいつでも、この上もない喜びと思うことができれば、どんなに幸いでしょうか。そして、それは不可能ではなく、信仰によって望みを抱く時にできると教えられているのです。試練の中でも、神の訓練には私の成長という目的があるという望みを抱きましょう。そして望みをもって忍耐し、喜びという逆転の発想に生きる者となりましょう。

3. 忍耐による成長 4

4節はその忍耐を働かせると、成熟した大人のクリスチャンに成長すると教えています。4節「その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」忍耐を完全に働かせるとは、忍耐の限りを尽くすこと、忍耐し続けることです。クリスチャンの信仰生活は一に忍耐、二に忍耐、三四がなく、五に忍耐、とにかく忍耐が必要なのです。ヘブル12:1では「自分の前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」とあります。それほど、信仰生活には様々な試練が押し寄せるのです。しかし、クリスチャンにとって幸いなことは、試練には神の目的があると知っていることです。ですから、忍耐を完全に十分に働かせることができるのです。

そうすればどうなるのでしょうか。「そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」完全な者とは、罪を犯さない完全な人のことではありません。救いの完成は地上ではなく、天国に行く時にあります。ここでの完全な者とは、何一つ欠けたところのないとあるように、クリスチャンとして必要な成熟の要素をすべて持っているということです。もし、信仰があっても行いが伴わないならば欠けがあります。行いがあっても信仰がなければ完全ではありません。行いがあっても品性が伴わないならば欠けがあります。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という九つの御霊の実がありますが、8つを持っても一つ欠けていけば、やはり完全ではありません。私たちが試練を通して信仰が訓練され、忍耐を働かせると、クリスチャンとして必要な要素を欠けることなく持つことができるようになるのです。それが完全な者の意味です。そしてそれが私達の目標であり、私たちの目指す望みです。その目標に向かって成長するために、神はあえてご自分の子どもに試練を与えて、訓練されるのです。

先ほど引用したローマ5:3と次の4-5節はこうです。「それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」忍耐が生み出す練られた品性は、成熟したクリスチャンが持つ要素の一つです。そして、苦難は希望を生み出すのです。苦難の中にも神の愛が私たちに注がれているからです。ヤコブも同じことを言っています。様々な試練に会う時も、神の愛の配慮があり、すべてを働かせて益とする神の摂理があり、私たちの成長のための神の訓練があるのです。ですから、「様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい」のみことばを信じ、試練の中でも望みを抱いて喜びましょう。そして、主の愛と恵みを味わいましょう。試練から忍耐が生まれ、忍耐を働かせると成熟した完全な者となることを覚えて、いつも主に信頼して歩みましょう。それこそクリスチャンに与えられた特別な恵みです。

ヤコブ1章5節～11節から「神の知恵を求める」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 神の知恵を求める 5

先週からヤコブの手紙の講解説教が始まりました。ヤコブはローマ帝国中に離散しているクリスチャンを教え励ますためにこの手紙を書きました。最初のテーマは試練です。各地のクリスチャンは迫害の試練をはじめ、経済的、肉体的、精神的試練など様々な試練を経験しながら信仰生活を送っていました。ヤコブはそのような彼らに、試練には成熟したクリスチャンに成長するための神の訓練という意味と目的があることを教え、だから試練にあうときには喜びなさい。そして忍耐を働かせなさいと教えました。今日はその続きです。5節「あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。」

ヤコブは神に知恵を求めなさいと教えました。では5節で教えられている、神に求めるべき知恵とはどのような知恵でしょうか。それは物事を神の視点で見ることができる知恵です。試練という文脈の中で考えると、試練を神の視点で正しく見るための知恵です。もし、神の視点で自分が経験している試練を見ることができれば、試練は私たちを成長させるための神の目的があり、そのための神の訓練だと知ることができます。その結果、試練の期間を無駄に過ごすことなく、試練を通して様々なことを学び、忍耐を働かせて成長し、主にあって喜ぶことができます。また、神の知恵を持つならば、どのような状況においても、自分の視点ではなく、神の視点で物事を見、洞察し、正しい判断をすることができます。その結果、すべてを働かせて益としてくださる主を見上げて、喜んで生きていくことができるのです。

しかし、実際に私たちが試練のただ中にあると、試練には神の計画と目的があることを知識として知っていても、そのことを十分に受け止めることができず、悩み苦しむ自分の弱さや力不足を覚えるのです。また試練以外の状況においても、神の視点で物事を見て、正しく判断する知恵に欠けていることを覚えるのです。ですから、私たちはみな「知恵に欠けている人」ではないのでしょうか。しかし感謝なことに、知恵に欠けている人は、神に知恵を求めれば与えられるとヤコブは教えているのです。

5節の最後は「求めなさい。そうすれば与えられます」です。これはイエスが祈りについて教えられた言葉です。ヤコブも神に知恵を求めれば、与えられると教えました。しかも「求めなさい」は継続的な意味があり「求め続けなさい」という意味です。知恵に欠けると思ったときには、いつでも何度でも神に求めれば与えられるのです。そして、それは神の御性質に基づいているのです。私たちが祈る神は、「だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神」です。「だれにでも」大人も子どもも、信仰生活の長い人も短い人も、どんな状況にある人にもです。「惜しみなく」今回は半分だけ与えるということはありません。神は惜しみなく私たちに必要な知恵をその時々と与えてくださいます。「とがめることなく」何回も求めると、少しは遠慮しなさいととがめる神ではありません。むしろ、私たちが求めないことをとがめる神なのです。ですから、試練にあうときには、私たちの成長の機会となるために、「求めなさい。そうすれば与えられます」の約束を信じて神に知恵を祈り求めましょう。そして、私たちに必要な知恵を神からいただきましょう。

2. 信じて求める 6-8

第1の点は何を求めるかについてでした。答えは知恵を求めるでした。第2の点はどうに求めるかについてです。その答えは信じて求めるです。6-8節「ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。その人は、主から何かをいただけると思っはなりません。そういう人は二心を抱く者で、歩む道すべてにおいて心が定まっていなからです。」「少しも疑わずに、信じて求める」これが、私たちが神に祈り求める時の信仰の姿勢です。しかし、これはどのような信仰の姿勢でしょうか。私たちは祈りながらも、これは難しいだろうなど思うことがあります。もし、そのような思いが少しでも生じれば、祈りは聞かれないということでしょうか。そうではないと思います。私たちは信仰においても祈りにおいてもまだまだ未完成です。百点満点を取れません。そのような私たちの祈りでも神は聞いてくださいます。

「少しも疑わずに、信じて求める」とは、神を信じて祈ることです。私たちを救ってくださった神は、求める者には与えてくださる神であることを信じて祈ることです。逆に、疑うとは求める者には与えてくださる神を信じないことであり、疑って祈る人とは、信仰と不信仰の二心を抱いて祈る人のことです。神への信仰と不信仰が共存している状態です。神を信じているようでも100%信じられない、どっちつかずで、心が定まっていない状態です。そのような人は、ちょうど風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようで、信仰と不信仰の間で揺れ動いているのです。そのような信仰と不信仰の両方を抱く状態で祈っても、主から何かをいただくことはできません。祈りは、神を心から信じて祈る必要があるのです。神に対する疑いを持ち、不信仰な思いで口先だけで祈っても、神はその祈りを聞かれません。

イエスはマタイ7章で「求めなさい。そうすれば与えられます」と教えられた後、マタイ7:9-11で続けて言われました。「あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに蛇を与えるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。」私たちが祈る神は、私たちを愛し、私たちを救うためにご自身の愛するひとり子イエスさえもお与えくださいました。御子イエスを与えてくださり、私たちを神の子どもとしてくださった父なる神は、ご自分の子どもの祈りに答え、私たちに必要な良き知恵を必ず与えて下さいます。ですから、父なる神を信じて祈りましょう。

3. キリスト者の誇り 9-11

第3の点では、どんな試練の中でもクリスチャンには誇ることができるすばらしい救いが与えられていることが教えられています。9節「身分の低い兄弟は、自分が高められることを誇りとしなさい。」ローマ帝国には階級制度がありました。身分の低い者は自由を束縛され、貧しく、苦しい生活を強いられます。しかし、そのような状態をクリスチャンは悲しみ、自己卑下する必要はありません。なぜなら、イエスを信じた時に神の子どもになったからです。王の王である神の子どもというすばらしい身分をいただいたのです。Iペテロ2:9では、クリスチャンのことを「あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です」と言っています。そして、やがて天の御国に引き上げられる約束をいただいています。ですから、この世にあって困難な状況にあって、神の子どもとされていることを大いに誇り、主の証し人のように堂々と生きることができるのです。

次に身分の高い、富んでいる人に対しての教えです。10-11節「富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい。富んでいる人は草の花のように過ぎ去っていくのです。太陽が昇って炎熱をもたらすと、草を枯らしめます。すると花は落ち、美しい姿は失われます。そのように富んでいる人も旅路の途中で消えていくのです。」クリスチャンにも身分の高い、富んでいる人がいました。しかし、もしその人が富を誇りとして生きるなら、その人は草のように過ぎ去るとヤコブは教えました。イスラエルでは春になると一面に花が咲き誇ります。ところが、南の砂漠からの熱風が吹くと、花はあっという間に枯れてしまいます。イスラエル旅行に行った人が、先週行った人は美しい草花を見ることができたのに、今週行った人はすべて枯れていて見られなかったということはよくあるようです。

ルカ12章に金持ちについてのイエスのたとえ話があります。ある金持ちの畑が豊作になりました。金持ちは喜び、大きな蔵を建てて穀物とすべての財産をしまい、食べて飲んで楽しもうと言いました。ところが神は彼に言われました。「愚か者。お前のたましいは今夜おまえから取り去られる。お前が用意した物は一体だれのものになるのか。自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

ヤコブは「富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい」と教えました。それは富を誇るのではなく、キリストのしもべとされたことを誇りなさいということです。富んでいる人は身分も高く、その当時は多くのしもべを持っていたでしょう。しかし、そのようなことを誇るのではなく、自らがキリストに仕えるキリストのしもべとなったことを誇るのです。そして、試練の中にある兄弟姉妹に仕え、彼らを助け、教会を建て上げるために神から与えられている富を用いるのです。

私たちが気をつけないとこの世の価値観に影響されます。この世では多くの物を持っている人が評価され、持っていない人は評価されません。格差が広がり、勝ち組、負け組という言葉もあります。しかし、クリスチャンはこの世の評価で自分を計り、人を計ってはいけません。そうではなく、神の評価で自らを計り、人を計るのです。それは神の知恵をいただいて、神の視点で物事を見、人を見て、正しく判断することです。神の視点から見れば、すべての人は神の作品であり、神のかたちに造られ、神に愛されている特別な価値ある存在です。「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」とあるとおりです。イザヤ43:4 また、特にイエスの十字架の身代わりの死を信じ、罪を赦され、神の子どもとされた人は、どんな社会的状況に置かれ、迫害の中で卑しめられていたとしても、神の目には尊い存在です。そのことを知る時に、私たちは主を誇り、神の子どもとしての立場を誇り、キリストのしもべであることを誇ることができます。

私たちが、神の視点で自分を見、自分が置かれた状況を見、試練の中でも主に信頼し、喜んで生きるためには神の知恵が必要です。「だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。」神の子どもとしての特権を十分に生かし、父なる神に求め、神の知恵をもってどんな時にも喜んで歩んでいきましょう。

ヤコブ1章12節～18節から「神からの良い贈り物」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. いのちの冠 12

ヤコブの手紙は、出だしから人生の試練について教えています。今までの箇所では、試練は私たちが成長させるための神の訓練であると教えられました。そして、その神のみ旨を知り、試練の中で忍耐を働かせると、私たちは成熟した信仰者に成長するのです。ちょうどスポーツ選手が競技でよい成績を治めるために、コーチが与える練習を日々行うようなものです。練習そのものは苦しいことでしょう。しかし、練習を通して強くなると知っている選手は進んで練習します。人生の霊的トレーニングである試練もそれ自体は決して喜べるものではなく、つらく苦しいものです。しかし、神が与える試練は、私たちの信仰の成長のためであり、私たちの益のためです。しかも私たちが耐えられるように、神は試練とともに脱出の道も備えてくださいます。そのことを知れば、私たちは試練の間も、主にあって喜ぶことができるのです。それが2節の「様々な試練にあうときにはいつでも、この上ない喜びと思いなさい」の意味です。

それでも信仰の弱い私たちは、試練を喜びと思えないかもしれません。そこで、ヤコブはさらに試練における幸いを教えました。12節「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。」試練に耐える人は幸いです。一体どのような幸いがあるのでしょうか。すでに教えられた幸いは、私たちの霊的成長です。12節ではさらに究極の幸いについて教えます。それは私たちが地上での霊的訓練を終えた後に、天でいただくいのちの冠です。聖書時代のスポーツ選手は優勝すると勝利の冠をいただきました。それはすばらしい光栄ですが、優勝者しか与えられませんでした。それに対して、いのちの冠は天国に凱旋するすべてのクリスチャンが神からいただくことができます。いのちの冠とは永遠のいのちの救いの完成です。私たちはイエスを信じた時にすでに永遠のいのちをいただき、神との親しい交わりに入れられました。そして天に行く時に、永遠のいのちの救いの完成を受けるのです。天国でいのちの冠をいただく時、私たちは神との親しい永遠の交わりに入れられ、永遠の幸いを得ることができます。この天におけるいのちの冠をいただくまで、私たちは地上における試練を耐え抜く必要があるのです。

12節では試練に耐え抜いた人とは、神を愛する者たちだと教えています。聖書は神を信じるとは、神を愛することであると教えています。「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」これはクリスチャンにとって一番大切な教えです。私たちは神への愛を、単なる感情ではなく、具体的な行動をもって表します。その具体的な行動の一つが、試練にあう時に、神を信じで耐えることです。試練の時の忍耐は、私は神を愛していますと告白することです。そして、このように神を愛して試練に耐える人には、神は約束通り天においていのちの冠を与えてくださるのです。神は試練に耐えた人を、「あなたはわたしを愛して、よく試練に耐えました」と言って、天に迎えてくださいます。その神のみ声を聞き、天に迎えられる時、私たちの苦労はすべて報われます。そして、永遠の神との交わりを喜び楽しむのです。だから「試練に耐える人は幸いです。」ですから私たちが試練にあうときは、神を愛して試練に耐えましょう。そして、信仰の成長と天におけるいのちの冠を受ける者となりましょう。

2. 誘惑に負ける原因 13-15

13節～15節は私たちが罪に向かわせる誘惑について教えています。実は聖書の原語では、試練と誘惑は同じ言葉が用いられています。同じ言葉が文脈によって試練の意味か誘惑の意味になるのです。それは、私たちが経験する一つの出来事が、信仰の訓練としての試練にもなるし、罪を犯させる誘惑にもなり得るということです。神が私たちに与える苦難は、みな私たちの成長という良い目的のための試練として与えられます。しかし、その試練の中で私たちが神を疑い出し、神から離れてしまうと、苦難は罪を犯す誘惑となってしまうのです。そしてある人は苦しみの中で誘惑に負けると、こんな状態にした神が悪い、神が誘惑したのだと自分の罪を神に責任転嫁するのです。それに対してヤコブは神がどのようなお方かを教えました。13節「だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言っではいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分で誰かを誘惑することはありません。」

善なる神は、悪と全く無関係なお方です。神は一つの悪も持っていない善なる良いお方です。ですから、神は悪に誘惑されることはありません。それが、イエスが一つの罪も犯されなかった理由です。そして、そのような善なる神は私たちが悪に誘惑することも決してないのです。私たちが誘惑に負けて罪を犯す原因に、神は決してなり得ないのです。では私たちが誘惑に負けて罪を犯す原因は一体何なのでしょう。それは自分の欲であるとヤコブは教えました。

14-15 節「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」神が与えられた人間の様々な欲は、それ自体は悪いものではありません。食欲も睡眠欲も性欲も私たちが生きていくために必要な基本的欲求です。私たちが自分の欲を神のみこころにかなって正しく用いるなら、私たちの人生を健康的に祝福されたものにしてくれます。ところが、自己中心の罪の思いを満たすために自分の欲を用いるならば、途端に罪を犯してしまうのです。

15 節は出産のイメージです。心の中に罪の思いを満たそうとする欲がはらむと、欲は心の中でだんだん大きくなり、ついに罪を生んでしまいます。そして、その罪の生活を悔い改めることなく続けていると、罪が熟して死を生むのです。ローマ 6:23 にあるように「罪の報酬は死です。」試練が与えるものはいのちの冠、永遠のいのちの祝福です。それに対して誘惑が与えるものは永遠の死である神のさばきです。全く結果が異なるのです。では私たちはどのようにして自分の欲を治め、誘惑に打ち勝ち、苦難を神からの試練と受け止め、罪ではなく成長の機会とすることができるのでしょうか。それは私たちの神への信仰によってです。第 3 の点でそのことを見ていきましょう。

3. 神からの良い贈り物 16-18

16 節「私の愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。」ヤコブは 2 節に続けて、親しく読者に呼びかけた後、「思い違いをしてはいけません」と教えます。一体何についての思い違いを述べているのでしょうか。それは神についての思い違いです。もし私たちが、神は私たちを悪に誘惑し、罪を犯させる悪いお方だと考えるなら、それは神について思い違いをしているのです。もし私たちが試練の中で、神は自分に悪いものを与えておられると考えて、神を疑うならば、それは思い違いをしているのです。ヤコブはそのような神についての思い違いをしてはいけない、神はそのような悪いものを与える悪いお方ではないと教えているのです。そしてヤコブは 17-18 節で神についての正しい知識を教えます。

17 節「すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものではありません。」神が私たちに下さるものはすべての良い贈り物、すべての完全な賜物です。確かに試練は私たちにとってつらく苦しいものですが、その目的は悪いものではなく良いものなのです。ここでは、神が下さる良いものの代表として光が挙げられます。太陽の光はすべての生き物にとってのいのちの源です。光がなければだれも生きていくことはできません。また月は地球の周りを 1 か月かけて回っているので、太陽に隠れて満ち欠けを繰り返します。しかし、神はそうのように移り変わることはないお方です。去年は良いものを下さったが、今年は悪いものを下さったとコロコロと変わるようなことは神にはないのです。神はいつまでも変わることなく、すべての良いもの完全なものを私たちに与えてくださるのです。そしてその神が下さる最高の良い贈り物、完全な賜物として、神の子どもとしての霊的新生を与えてくださいました。

18 節「この父が私たちを、いわば被造物の初穂にするために、みこころのままに真理のこトばをもって生んでくださいました。」罪は死を生みますが、神が下さる賜物である真理のみこトばは神の子どもを生むのです。私たちも神のこトばである真理のこトばを通して、真理であるイエスを知り、イエスを信じた結果、神の子どもとして新生しました。「私たちを被造物の初穂にするために」とは、クリスチャンは神の救いの初穂としての祝福に預かっているということです。そのような最高の良い完全な賜物を下さる神が、私たちを罪に誘惑するはずがありません。私たちに悪いものを与えるはずがないのです。

ですから、試練の時に神を疑ってはいけません。思い違いをしてはいけないのです。私たちが経験するどんな苦難も、神は私たちの益のため、良い目的のための試練として、信仰の成長のための訓練として与えておられます。それを悪いものとするのは私たちの欲です。欲は私たちを罪に誘惑し、神と神のみこころから私たちを引き離します。そして不信仰に陥らせて、罪を犯させます。試練の時は私達の信仰が試されています。私たちの神への愛が試されています。試練の中で神を疑わず、神は良いお方であり、良いものを下さる神だと信じ続け、神を愛し続けて忍耐することができれば、私たちは信仰のテストに合格します。すると、私たちの信仰は成長し、ますます神を愛する者に、何一つ欠けたところのない成熟した完全な者になることができます。そして、やがていのちの冠を天でいただくことができます。

私たちに御子イエスを与え、真理の言葉によって神の子どもとしての新生を与え、永遠のいのちの祝福を与えてくださった神を、どんな時にも疑うことなく信じる者となりましょう。どんな時にも神の私たちへの愛を疑うことなく、神を愛する者となりましょう。そして、神を愛する者として、試練の時にも忍耐を働かせ、神が下さるすべての良い贈り物をいただく者となりましょう。今週も移り変わることはない神の愛と恵みに信頼し、主と共に歩んでいきましょう。

ヤコブ1章19節～27節から「みことばを行う人」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. みことばを聞く人 19－21

今日の箇所では、22節の「みことばを行う人になりなさい」が中心的な教えです。ヤコブはその前にみことばを聞くことの大切さを教えています。19－20「私の愛する兄弟たち、このことをわきまえていなさい。人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。人の怒りは神の義を実現しないのです。」ヤコブは「私の愛する兄弟たち」と再び親しく読者に呼びかけた後、みことばを聞くことの大切さを教えました。

「人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。」この教えは人間関係において大切です。口は一つ、耳は二つあるので、自分が話す二倍相手から聞くのがちょうどよいと言われます。怒りは納めないと相手の心も自分の心も傷つけます。一方、この文脈においてはむしろ神との関係において教えられています。「聞くのに早く」即ち、みことばによく聞くことです。「語るのに遅く」みことばに聞く前に、自分の考えを語り、自分の考えに従って生きてはいけません。「怒るのに遅く」みことばをよく聞き、理解していないと、例えば、試練を受けるとその意味が分からず、「神様、なぜこんな苦しみを与えるのですか」と言って、神に対して怒ります。しかし、みことばに聞く人は、試練は神が私たちを成長させるための訓練であり、そこにも神の愛と摂理があることを知って怒らず、むしろ忍耐し、その期間に成長していくことができます。

「人の怒りは神の義を実現しないのです」とありますが、怒りには神の義を実現する怒りとそうでない怒りがあります。神の義を実現する怒りとは、神の正義が行われていないことに対する怒りであり、義憤のことです。イエスも宮きよめでは神の義を実現する聖なる怒りを現わされました。そのような怒りは持っても良いのです。一方、神の義を実現しない怒りとは、自分の願いどおりにならない時に神に対して、あるいは人に対して腹を立てる怒りです。それがここで言われている人の怒りです。そのような怒りは何の益にもならないのです。ですから、怒りを覚える時には、これは神の義を実現する怒りなのか、あるいは神の義を実現しない怒りなのかを考えなければなりません。そして、神の義を実現しない怒りは治めることが大切なのです。それが「怒るには遅く」の意味です。

21節ではみことばを聞くことは、みことばを受け入れることだと教えます。21「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植え付けられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」ここでは種蒔きのたとえが用いられています。クリスチャンはすでにみことばを信じて救われているので、みことばはすでに心に植え付けられています。そして、みことばが心の中でしっかり根を張り、上に伸びて30倍、60倍、100倍の実を結ぶためには、2つのことが必要です。一つは「すべての汚れやあふれる悪を捨て去る」ことです。心の中に生える罪という雑草を取り除かないと、芽が塞がれて上に伸びることを妨げます。ですから、私たちは日々罪を悔い改め、罪を捨て去らなければなりません。もう一つは、「みことばを素直に受け入れる」ことです。たとえ自分の思いや考えと違うみことばであっても、神のことばには間違いないと信じ、素直に受け入れ、信じることです。そのようにすれば、私たちは地上で実を結ぶだけでなく、やがて天における救いの完成を得ることができるのです。私たちはまずみことばに聞くことを大切にしましょう。それが信仰生活の土台です。

2. みことばを行う人 22－25

22節は今日の箇所の中心の教えであるとともに、ヤコブの手紙の中心的な教えです。22「みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となてはいけません。」ヤコブは先にみことばを聞くことの大切さを教えました。しかし、ここではただみことばを聞くだけではいけないと教えます。家を建てる時にまず土台を作ります。土台は大切です。けれども土台を作ってそれで終われば、工事は未完成です。土台の上に家を建ててこそ、工事は完成します。信仰生活も同じです。みことばを聞くという土台の上に、みことばを行うという建物を建てなければ、信仰生活は完成しないのです。ヤコブはみことばを聞くだけで満足し、みことばを行わない人は、自分を欺いていると言っています。そして、そのような人は本当にみことばを聞いているのかと問いかけます。

23－24「みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺めている人のようです。眺めても、そこを離れると、自分がどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。」私たちも朝起きると鏡を見ます。そして自分の顔を見、身支度をしてその日を始めます。すると朝見た自分の顔を忘れてしまうことがあるでしょう。ヤコブは、みことばを聞いても行わない人は、ちょうどそのような人だと言います。私たちは朝読んだみことばを忘れて、一日を歩むことがあります。また日曜日の説教のみことばを忘れて一週間を歩むこともあります。しかし、ここでは単なる記憶力のことを言っているわけではありません。人間は忘れやすい者ですから、みことばを思い出せないことがあります。ここで言っていることは、みことばに生きる姿勢さえも忘れて、ただ読んで、聞いている、頭だけで理解して満足し、それを実行し

ようとしなない人のことです。みことばの重要性が心の中から抜けてしまっているのです。そのような人はただ聞くだけで満足し、みことばを行うことの大切さを忘れてしまっているのです。ヤコブはそれでは、クリスチャンとして自分を欺いて生活していると教えます。そうであってはいけないのです。では、どのような人になる必要があるでしょうか。

25「しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」自由をもたらす完全な律法とは、イエスが成し遂げてくださった救いのみことばです。ヨハネ 8:32 でイエスは「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」と言われました。私たちも真理のみことばを信じた時に、罪と死からの自由を得ました。そのみことばをその後も一心に見つめ、そこから離れず、みことばを行うことが自分の使命であることを知っている人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になるのです。神はみことばを行う人を祝福してください。ですから、私たちがみことばを聞く時、それは私たちがみことばを行うために聞いていることを覚えましょう。単に聞いて満足するのではなく、みことばに記されている神のみこころを行うことこそ、私たちの人生の使命であることを覚えて、みことばを行う人になりましょう。

3. きよく汚れのない宗教 26-27

神学校で学んでいた時、ある先生から「皆さんが神学校を卒業して牧師や伝道者になるということは、宗教家になるということです」と言われ、少々驚きました。その時には、宗教家になるという意識がなかったからです。その時は、イエスのために働きたいので訓練を受けているという意識でした。しかし言われてみれば、牧師はこの世の考えでは宗教家ということになります。あなたの宗教は何ですかと問われれば、クリスチャンはキリスト教ですと答えます。ヤコブはここで3回宗教という言葉を用いています。宗教とは内面にある信仰の外見的な形式のことです。クリスチャンにとってはイエスを信じる信仰を、教会における礼拝や奉仕や伝道で表し、教会を組織します。それらは宗教的な面ということができでしょう。ヤコブはここで、父である神の御前できよく汚れのない宗教とはどのようなものを三つの点で教えています。そして、それらは2章以降でさらに教えられます。

26-27「自分は宗教心にあついと思っても、自分の舌を制御せず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。父である神の御前できよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っている時に世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。」きよく汚れのない宗教の特徴の一つ目は、自分の舌を制御することです。宗教心があついと思っている人は、行いを大切にする人でしょう。礼拝も献金も奉仕も伝道もしているかもしれませんが、もしその人が自分の舌を制御できないならば、その舌で過ちを犯してしまうことになります。きよく汚れのない宗教は、語るのに遅く、何を語ればよいのかをよく吟味し、語るべきことを語り、語らなくてもよいことは語らないのです。

二つ目は愛の行いをすることです。みことばを行うのは自分の行いを人に見てもらい評価されるためではありません。そうではなく、神を愛し、人を愛するために行うのです。「孤児ややもめたちが困っている時に世話をする」ことは、隣人を愛するゆえの行いです。神の御前できよく汚れのない宗教には、愛の奉仕が必ずあります。週報にも短く紹介していますが、教会学校図書「少年少女信仰偉人伝」シリーズでは、明治以降に活躍したクリスチャンから多くのことを教えられます。児童福祉の父と言われる石井十次は、明治時代、日本でまだ誰も手掛けたことのない孤児院を岡山で始めます。彼は多くの孤児たちを受け入れ、彼らを愛し、自立できるように育てました。その働きは日本だけでなく世界にも知られ、多くの支援者が支えました。彼の働きは石井十次の神を愛し人を愛する信仰から始まりました。やがてその働きは国を動かし、今日の児童福祉施設へと発展していきました。私たちも自分にできる愛の奉仕を行う者になりましょう。

三つ目は自分を聖く保つことです。「この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。」どんなに舌を制御し、愛の行いをする人であっても、その人が罪の中に生きているならば、その人の信仰、その人の宗教はむなしいのです。そのような人は自分を欺いており、決して祝福されません。この世の誘惑は強いものです。私たちは自分の欲に引かれると、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生むと教えられました。ですから、自らの欲に陥らないように注意する必要があります。罪に気づけばすぐに悔い改め、罪の深みに入り込まないように自分を守らなければなりません。

私たちがみことばを聞き、みことばを行う人になれば、人々はキリスト教はきよく汚れのない宗教だと知り、その結果、救い主イエスを知り、信じることにつながる良き証しとなります。今週もみことばに聞き、みことばを行う人として、主によって遣わされましょう。

ヤコブ2章1節～7節から「信仰と行いの一致」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 信仰と行いの一致 1－4

先週学んだ1:22でヤコブは「みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません」と教えました。すなわちクリスチャンには、信仰と行いの一致が必要なのです。信じていても行わないならば、その人の信仰は空しいのです。今日の箇所は、具体的な例を挙げて、信仰と行いの一致を教えています。1節「私の兄弟たち。あなたがたは、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持っていながら、人をえこひいきすることがあってはなりません。」ヤコブはここでえこひいきの問題を挙げて、信仰とえこひいきは一致しないと教えました。そして、2－4節で教会におけるえこひいきの問題を具体的に教えています。

2－4「あなたがたの集会に、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来て、また、みすばらしい身なりの貧しい人も入って来たします。あなたがたは、立派な身なりをした人に目を留めて、『あなたはこちらの良い席にお座りください』と言い、貧しい人には、あなたは立っていなさい。でなければ、そこに、足元に座りなさい」と言うなら、自分たちの間で差別をし、悪い考えでさばく者となったのではありませんか。」

当時のローマ帝国には身分制度があり、身分の高い人は富を持ち、社会的にも優遇されました。一方、身分の低い人は貧しく、奴隷は私有財産を持つこともできませんでした。そして、貧しい人は社会的にも冷遇されました。ですから、ここでの例のように、一般の集会に富んでいる人と貧しい人が同時に入ってきたら、富んでいる人には良い席を案内し、貧しい人には立見席か地べたに座る場所に案内していただいでしょう。しかし、教会ではそうであってはいけません。ヤコブは今日の箇所ですその理由を3つ教えています。

第一の理由が、えこひいきは私たちの信仰と一致しないことです。クリスチャンは「私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰」を持っています。ここで私たちの主のことを栄光のイエス・キリストと呼んでいるのには訳があります。それはクリスチャンが栄光のキリストを信じるなら、はかないこの世の栄光ではなく、永遠に残るキリストの栄光に価値を置く者となるからです。一方、富んでいる人をえこひいきするのは、この世の栄光に価値を置くことです。この世の栄光である富や高い身分に価値があると考えれば、当然富んでいる人をえこひいきするでしょう。もしクリスチャンが富んでいる人にえこひいきすれば、この世の栄光に価値を置くことになり、信仰と行いが一致しなくなるのです。

さらにキリストの栄光は十字架の死において現わされました。主の十字架の前には、すべての人が平等です。富める者も貧しい者もみな罪人です。そしてすべての人は、ただ主の十字架の贖いによって罪を赦され、神の子どもとされ、互いに主にある兄弟姉妹となりました。その信仰に立つならば、教会の中で身分や貧富の差で差別があってははいけません。ガラテヤ3:28でパウロはそのことを教えています。「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」もし、この信仰を実践するなら、たとえ社会において差別やえこひいきがあったとしても、教会内ではそのようなものは一切なくなるはずなのです。

今の時代もこの社会はこの世の栄光を求め、この世の栄光の価値基準で人を判断します。しかし、私たちはそうであってはいけません。なぜなら、私たちは「私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰」を持っているからです。私たちクリスチャンは、この世の栄光の価値基準ではなく、キリストの栄光の価値基準で人を判断します。栄光の主の前では、すべての人が神に愛されている存在です。イエスがいのちをささげてくださったほど愛されているのです。その主の栄光の前では、この世の栄光は、はかなく過ぎ去り、ただ主の栄光だけが永遠に残ります。私たちはいつも自分の信仰を基準として、何が主に喜ばれることなのかを悟って行動しましょう。そうすれば、うわべで判断してえこひいきをしたり、差別をし、悪い考えで人をさばく罪から守られます。

2. 神の救い 5－6a

ヤコブは5～6節前半にかけて、人をえこひいきしてはいけない第2の理由を教えています。それは神の救いの働きと相いれないからです。「私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。それなのに、あなたがたは貧しい人を辱めたのです。」神はすべての人を愛し、すべての人を救いたいと願っておられます。ですから、富んでいる人も貧しい人も、身分の高い人も低い人も何の差別もなく、救いの手を差し伸べてくださいます。福音は何のえこひいきも差別もなく、すべての人に宣べ伝えられるのです。そして、イエスの十字架のことばに心を開き、イエスを救い主と信じた人の中に、貧しい人が多

くいたのです。もちろん富んでいる人もいました。けれども貧しい人のほうがより多くいました。そして、神はイエスを信じたこの世の貧しい人を救い、信仰に富む者としてくださったのです。さらに神を愛した彼らを天の御国を受け継ぐ者としてくださいました。そのようにこの世の貧しい人を救われた神の救いの働きがあるのに、教会の中で富む者をえこひいきするようなことがあれば、それは神の働きに反対することになるのです。

私たちは、教会で様々な人に対する対応を考える時に、神はどのようなお方なのか、イエスはどのように人に接してくださったかを覚える必要があります。そしてもし、私たちの対応がイエスの対応と違うのであれば、私達の対応を改めなければなりません。もし、教会内でえこひいきや差別があるならば、それは神の救いの働きに反対することなので、改めなければなりません。以前私がアメリカで生活した時に、一般社会の中ではアジア人だということで差別を感じたことがありました。しかし感謝なことに、教会や神学校では差別を感じたことは一度もありませんでした。それは神と同じの思いを教会や神学校の人々が持っていて、それを実践していたからです。神はどんな人も愛して救ってくださるお方です。その神を信じている私たちは、どんな人も神に愛され、救おうとしておられることを覚えて歓迎し、救いに導く教会となりましょう。

3. 尊い主の御名 6b-7

富んでいる人をえこひいきしてはいけない第3の理由は、彼らの多くが神に敵対していたからです。6b-7「あなたがたを虐げるのは富んでいる人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を汚すのも、彼らではありませんか。」ここでの富んでいる人たちは、未信者の富める人のことです。当時の富める身分の高い人は、往々にして貧しい身分の低い人を辱めました。奴隷は主人からひどい扱いを受けることもあったでしょう。また富める人は十分持っているにもかかわらず、貧しい人からさらに富を搾取しようとし、貧しい人の生活はますます困難になりました。さらに、富める人は、貧しい人からお金や土地や私有財産を取り上げるために、彼らを裁判所に引いて行ったのです。そして、裁判官も富める人にえこひいきし、不正な判決を下して、身分の低い貧しい人を苦しめました。その貧しい人の中に多くのクリスチャンがいました。さらに身分の高い富める人が、クリスチャンを迫害し、主の尊い御名を汚していたのです。

そのような社会状況であるにも関わらず、身分の高い富める人が教会に来た時に、彼らをえこひいきし、貧しい人が教会に来ると差別することがあれば、それは神の御名を汚す側に教会自らがついていることではないかとヤコブは行っているのです。御名が聖なるものとされますようにと祈りつつ、尊い御名を汚す側に付くことは、自己矛盾であり、信仰と行いの不一致なのです。

聖書の時代の社会と今日とは随分状況が違うので、ヤコブが挙げた例が同じように今日に当てはまらないかもしれませんが、けれども原則は同じです。私たちも自分の行動によって、御名が聖なるものとされているかどうかを確認することが大切です。もし、「御名が聖なるものとされますように」と祈りながら、御名を汚す行動をしているなら、それは信仰と行動の不一致となり、行動を改めなければなりません。私たちが、神に喜ばれる人間関係を教会の中で、さらには社会においても築いていけば、私たちの行いを通して、主の御名が聖なるものとされています。一方で、主のみこころに逆らう人間関係を持ち、言葉や行いで人を傷つけていけば、尊い御名を汚していることになります。そうであれば私たちは主の前に悔い改めて、主に喜ばれる人間関係を築いていく必要があります。

私たちは弱く罪深いので気を付けていないと、すぐに失敗してしまいます。ですから、主の祈りで「御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈る時に、自分の生き方を吟味することが大切です。自分の生き方、自分の行動によって、御名が聖なるものとされているかどうかを点検するのは、主が今来られても大丈夫かを点検します。みこころを行っているかどうかを点検します。そして、みこころを行うことによって、御名が聖なるものとされ、御国を待ち望む信仰へと整えていくのです。そうすれば、私達の信仰と行いが一致して、御名をあがめ、キリストの栄光を現す人生を歩むことができるでしょう。主はすべての人を愛し、すべての人を救いたいと願っておられる神です。貧しい人を信仰に富む者とし、御国を受け継がせてくださる神です。その神のみこころを知り、みこころを行う者となりましょう。どんな人にも分け隔てなく接し、主にある兄弟姉妹の交わりのすばらしさを証しし、その交わりに招く証し人となりましょう。

ヤコブ2章8節～13節から「神のあわれみ」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 立派な行い 8－9

ヤコブの手紙は、信仰と行いの一致の大切さを教えています。クリスチャンは、みことばをただ聞くだけでなく、行うことが大切なのです。先週の箇所では、教会の問題となっていたえこひいきを取り上げ、人をえこひいきすることはキリストへの信仰と一致しないと教えました。では人間関係において、キリスト信仰と一致する行いとはどのようなものなのでしょうか。それは最高の律法によって教えられているとヤコブは言いました。8「もし本当に、あなたがたが聖書にしたがって、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いは立派です。」

イエスはマタイ22章で、律法の中で重要な第一の戒めは「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」だと教えられました。これは神との関係を教える戒めです。そして、重要な第二の戒めとして「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」を挙げられました。これは人との関係を教える戒めです。そして旧約聖書全体がこの二つの戒めにかかっていると教えられました。ヤコブはそれを受けて、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」が、信仰と一致する人間関係における行いだと教えたのです。そしてこの戒めを「最高の律法」と呼びました。それはどんな人間関係の戒めもすべてこの戒めに集約することができるからです。この隣人愛の戒めを守るなら、「あなたがたの行いは立派です」と言われるのです。

「最高の律法」は脚注にあるように「王の律法」と訳すこともできます。イエスを信じて救われた人は、5節にあるように「御国を受け継ぐ者」とされました。御国の王はイエスです。私たちはイエスを信じた時、天の国籍を与えられ、王なるイエスの律法に従う者とされました。王なるイエスの律法は最高の律法であり、この律法を守り行えば、地上にあっても愛に満ちる社会を築くことができます。そして、それはまず教会の中で行われるべきもののなのです。イエスの御国は地上にあっては教会の中に始まっているのです。私たちが「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を行えば、教会は愛に満ち、「あなたがたの行いは立派です」と主からほめていただくことができます。逆に教会の中で人をえこひいきし、差別するなら、最高の律法の違反者となるのです。9「しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。」

先週も述べましたが、当時のローマ帝国は身分社会であり、身分の高い富める人が優遇されるのは当たり前の常識でした。しかし、神の御国を受け継ぐ者の集まりである教会は、この世の常識や価値観ではなく、「最高の律法」に基づく人間関係が築かれなければなりません。教会の中ではガラテヤ3:28にあるように、「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」そして、その人間関係を築くためには「最高の律法」を守ることが必要なのです。

私たちも教会における兄弟姉妹との交わりにおいて、いつも「最高の律法」である「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」を実践することを心がけましょう。この戒めに反することは主のみこころでないで、たとえ一般社会で行われていることであっても教会では行わないようにしましょう。また隣人愛を積極的に実践しましょう。その場合、相手が何を望んでいるのかを確かめて行うようにしましょう。それが隣人を尊重し、隣人に愛を示すことにつながります。相手がしてほしいことを行い、してほしくないことは行わないことが隣人愛です。一言「お手伝いしましょうか」と相手に聞いてから、相手の意思を尊重してお手伝いするのが良いのではないのでしょうか。遠慮深い人には、もう一度遠慮しなくてもいいですと確認してはどうでしょうか。

教会における最高の律法の実践は、私たちが社会において主の証し人として生きる上でも、大切な戒めです。この世の愛がますます冷えていく中で、クリスチャンが隣人愛を実践するなら、神の愛を人々に届けることになり、そこから福音に心を開く人が起こされることでしょう。私たちが今週遣わされる家庭や学校、職場、社会において、主の助けをいただきながら最高の律法を実践する者となりましょう。

2. 自由をもたらす律法 10－12

クリスチャンには最高の律法が与えられています。しかし、それを完全に守り行うことの難しさを10-11節は教えています。「律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。『姦淫してはならない』と言われた方は、『殺してはならない』とも言われました。ですから、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になっているのです。」

もし、真っ白のワイシャツやブラウスに、しみが一つでも付いていたら、その商品は不良品となって売ることができません。小さいしみ一つで後は白だから大丈夫ということにはならないのです。1つのしみ全体を不良品とするのです。同様に、私たちも律法全体を守っていても、一つの点で過ちを犯すなら、その人は律法の違反者となり、神の前に罪人となる

のです。姦淫しなくても人殺しをすれば、律法の違反者となります。「私は姦淫も人殺しもしていません」と言う人もいるでしょう。しかしイエスは言われました。「情欲を抱いて女を見るものはだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。」「兄弟に対して怒る者はだれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』という者は最高法院でさばかれます。『愚か者』という者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」神の律法は、私達の行いだけでなく、心の中の思いや言葉でも守ることを求めているのです。そうであれば、一体だれが律法を完全に守ることができるでしょうか。私たちはみな律法の違反者であり、聖書が言うようにすべての人は罪人なのです。

しかし良い知らせ、福音があります。それは、律法は救い主イエス・キリストを指し示しているということです。私たちは律法によって罪とされ、その結果、神のさばきを受ける者となりました。しかし、神は私たちを救いために救い主を遣わすことを律法の中で約束してくださっていたのです。そしてそのとおり、救い主イエスが来て下さり、私たちの罪のために神のさばきを身代わりに十字架で受けて死んでくださいました。そして、三日目によりみがえられ、今も生ける救い主として天におられます。私たちはイエスを信じることによって、すべての罪が赦され、律法の違反者であるにもかかわらず、神の前に義と認められ、罪のない者としての立場を与えられ、神の子どもとして受け入れられるのです。

すると、クリスチャンにとっては律法の意味が変わりました。それまでは律法は私たちを罪に定めるものでしたが、クリスチャンにとっては、律法は生き方の目標となったのです。12「自由をもたらす律法によってさばかれることになる者として、ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい。」「自由をもたらす律法」は1:25にも出てきました。イエスは言われました。「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」ヨハネ8:32 ある人はクリスチャンになるといような生活の規則が与えられて、不自由になるのではないかと思います。しかし、実際はそうではないのです。魚は水の中にいると自由に泳ぎ回ることができます。もし、魚が水の中は不自由だ、外に出て自由になりたいと思って水から出れば死んでしまいます。人間も同じです。神の教えを守り行うことは不自由になることではなく、罪から離れ本当の自由を味わって生きることなのです。一方、神の教えを破り、自分の欲のままに生きれば、罪の中にがんじがらめとなり、不自由となるのです。イエスによって救われると、私たちは神のことばを喜び、それを行いたいと願う者に変えられます。律法は私達の生きる倫理道德の基準となり、それを目標として生きようになります。もちろん、律法が生活の基準ですから、それを行わないならその基準によってさばかれます。しかし、私たちには主の十字架の赦しがあります。できなかったことは悔い改め、主の赦しをいただいて、再び神のことばを目標に生きることができるのです。

3. 神のあわれみ 13

13 節は、神のあわれみを受けた者の生き方を教えています。「あわれみを示したことがない者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」マタイ 18 章でイエスはたとえ話であわれみについて教えられました。ある人が1万タラント、現在の6千億円という莫大な負債を主人から免除してもらいました。ところがその人は、百デナリ、百万円の負債を負っている人を赦さず、牢に入れたという話です。主人はその話を聞き、大変悲しみ、その人が負債を返すまで牢に入れたのでした。彼は自分が主人からどれほど大きなあわれみを受けたかを理解していなかったで、他の人をあわれむことができなかったのです。ヤコブはここで同様のことを言います。「すべての罪の負債を免除されたという神のあわれみを経験した人は、隣人に対してあわれみを示すのは当然のことではないか。もし、人に対してあわれみを示したことがないなら、その人は本当は神のあわれみを経験していないことになる。即ち、信仰を持っていると言いながら、実際は信じていないことになるのではないか。そうであれば、神のさばきの時にはあわれみのないさばきが下される。」と言っているのです。

私たちにとって、神のさばきの時ほど神のあわれみが必要な時はありません。しかし、イエスを信じる者にはすでに、神の豊かなあわれみが示され、すべての罪の負債がイエスのいのちの代価によって帳消しにされたのです。ですから、神のさばきの時には神のあわれみが私たちに示され、私たちはさばかれることなく、新しい神の御国に迎え入れられるのです。それが「あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです」という意味です。

私たちはイエスを信じて救われ、神の豊かなあわれみの中に生かされていることを感謝しましょう。そしてそれゆえに、神から受けたあわれみを自分も隣人に実践する人になりましょう。最高の律法を守り、自由をもたらす律法を目標として生きていきましょう。そのために、私たちは救われ、神の子どもとしてこの世に遣わされているのです。

ヤコブ2章14節～19節から「役に立つ信仰」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 役に立つ信仰 14～17

ヤコブは「みことばを行う人になりなさい」と言って、信仰における実践面の大切さをこの手紙で教えています。信仰の重要性を教えるパウロの手紙と、行いの重要性を教えるヤコブの手紙は比較されて、互いに矛盾しているのではないかと言われることがあります。しかし実際は、互いに矛盾しているのではなく、互いに補い合っているのです。パウロは、人は律法を行うことによって救われると教える律法主義者と戦っていました。そして、人が救われるためには行いは必要なく、キリストを信じる信仰のみによって救われると教えました。一方、ヤコブは信仰義認の教えを曲解し、信仰のみによって救われるのだから、良い行いは必要ないとする無律法主義者と戦っていました。そして、本当の信仰は必ず良い行いの実を結ぶのだから、クリスチャンにとって良い行いは重要であると教えました。パウロもヤコブもどちらも信仰義認を信じ、さらに救われたクリスチャンは良い行いの実を結ぶと教えているのです。

今日の箇所でもヤコブは、行いが伴わないクリスチャンに対して、行いの重要性を教えています。14「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」ここでヤコブは2つの質問をしています。一つは、行いのない信仰は何の役に立つでしょうかという質問です。答えは何の役にも立たないです。もう一つは、行いのない信仰がその人を救うことができるでしょうかです。答えは救うことができません。ですから14節で教えていることは、行いのない信仰は、自分の救いのために役に立たないということです。

13節で見ましたが、私たちが神のあわれみを最も必要とするのが、神のさばきの日です。そして、さばきの日に役に立つのがイエスを信じる信仰です。なぜなら、イエスが私たちのすべての罪を十字架で贖ってくださり、罪が赦され義と認められているので、神のあわれみを受けてさばかれることがないからです。ところが、行いのない信仰は本当の信仰ではないので、さばきの時に自分のために役に立たないのです。さらにヤコブは15～16節で行いのない信仰は、自分のためだけでなく、人のためにも役に立たないと言っています。

15～16「兄弟か姉妹に着る物がなく、毎日の食べ物にも事欠いているようなときに、あなたがたのうちのだれかが、その人たちに『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい』と言っても、からだに必要な物を与えなければ、何の役に立つでしょう。」これは口先だけの信仰で、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を守り行わない信仰です。このような信仰は人の役にも立ちません。そして、人の役に立たない信仰は、自分の救いのためにも役に立たないのです。マタイ25章でイエスは人々を右と左に分け、右側の人たちには「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」と言って祝福し、永遠のいのちに入ると言われました。一方、左側の人たちには「お前たちがこの最も小さい者たちの一人にできなかったのは、わたしにできなかったのだ」と言って、永遠の刑罰に入ると言われました。イエスはここで行いによる救いを教えられたのではなく、イエスを信じる者は人に役立つ良い行いの実を結ぶと言われ、そのような信仰がその人を永遠のいのちの救いに導くと教えられたのです。そして、ヤコブも同じことを言っているのです。

17「同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。」死んだ信仰は、自分の役にも人の役にも立ちません。良い行いの実を結ばず、さばきの日にも役に立たないのです。一方、生きた信仰は、自分のためにも人のためにも役に立ちます。私たちが永遠のいのちの救いに導き、さらに隣人愛を実践して人の役に立つ者とします。ですから、自分のためにも人のためにも役に立つ、みことばを行う生きた信仰を持つ者となりましょう。

2. 行いを伴う信仰 18

18～19節ではヤコブの教えに対する2つの反論を挙げ、それに対して答えています。18節は一つ目の反論とそれに対するヤコブの答えです。18「しかし、『ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります』という人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。」「しかし」とあるので、18節の鍵カッコの言葉はヤコブの教えに対する反論であることが分かります。では「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」は何を意味しているのでしょうか。それは信仰や行いは賜物の違いであり、信仰を持っている人全員が必ずしも良い行いをするのではないという反論です。確かにⅠコリント12章には信仰の賜物が教えられ、ローマ12章には奉仕の賜物、分け与える賜物、慈善の賜物が教えられています。

しかし、賜物としての信仰とは、救いに導く信仰のことではなく、特別な奉仕を行うための信仰のことであり、やはり行いの実を結ぶのです。そこでヤコブは言いました。「行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。」本当の信仰は、生活の中で結ぶ良い行いの実をもって見ることができるとヤコブ

は教えました。そして、ヤコブ自らがイエスを信じる信仰を持った後、どのような行いの実を結ぶことができたかを見せることができると言いました。ヤコブはイエスの兄弟として、イエスと同じ家で育ちました。けれども、復活のイエスと出会うまでイエスを救い主と信じることはできませんでした。そして、復活のイエスとお会いし、イエスを救い主と信じる信仰を持った時から、彼の生き方が全く変えられたのです。彼はやがてエルサレム教会の指導者となり、教会を牧会し、隣人を愛する良いわざに励みました。またローマ帝国に離散するクリスチャンのために労し、そしてこの手紙を書いています。イエスを信じていなかったなら、ヤコブはナザレの村で大工として一生を過ごしていたかもしれません。ヤコブに与えられた生きた信仰は、彼の生き方を変える力があつたです。

もし、信仰を持っていると言いながら、その人の生き方が変わらず、良い行いの実を結んでいなかったら、その人の信仰は死んでいるのであり、何の役にも立たないのです。それに対して、19 節ではもう一つの反論を紹介し、それに対してヤコブが答えています。第3 の点でそのことを見ていきましょう。

3. 知識だけの信仰 19

19「あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。」ある人は「あなたの信仰を見せてください」というヤコブの問いかけに対して、信仰の知識をもって自分の信仰を見せようとしてしました。「あなたは、神は唯一だと信じています」は、申命記6章の「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である」のみことばからきています。ユダヤ人はこの言葉から始まる信仰告白を、朝夕唱えていたのです。ですから、私には正しい信仰の教理を言い表すことによって、自分の信仰を見せることができると言いました。それに対してヤコブも「立派なことです」と言って、正しい信仰の知識を持っていることは良いことだと言います。けれどもその後で「ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています」と言って、知識だけの信仰は悪霊の持つ信仰と同じだと言って、その誤りを指摘しました。悪霊どもは唯一の神を知っていて信じています。イエスが救い主としての働きをした時、悪霊はイエスを「神の子、神の聖者、いと高き神の子イエスよ」と呼び、「私を苦しめないでください」と懇願しました。

このように悪霊も、神と救い主イエスについての知識は十分持っているのです。けれども、悪霊は神のさばきを恐れつつ、神に従おうとはせず、逆らい続けるのです。ヤコブは信仰の知識を持っているだけでは悪霊の信仰と同じだと言います。そのような信仰は頭だけの信仰であり、心から神を信じ、神に従う信仰ではないのです。生きた信仰ではないので、行いの実を結ぶことができないのです。

今日のみことばを通して、私たちは自分の信仰はどうだろうかと考えさせられます。ある人は信仰には行いが大切だから、頑張って良い行いに励もうと思うかもしれません。またある人はヤコブのように「私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます」など到底言えないので、自分の信仰はダメなのかと思うかもしれません。またある人は信仰の知識は役に立たないと思うかもしれません。しかし、そのどれも違います。信仰の成長のためには正しい聖書の知識が必要です。正しい信仰の知識は私達の信仰を成長させてくれますし、間違った教えから私たちを守ってくれます。また、私たちの信仰も行いも成長段階であり未熟なので、みんなに見てもらえるような誇らしいものではないのも当然です。また信仰生活の中での良い行いは自分の力で頑張っているものではないのです。

では私たちが生きた信仰を持ち、その結果良い行いの実を結ぶ人生を過ごすためにはどうしたらよいのでしょうか。それは絶えずイエスに信頼し、イエスにつながって生きることです。ヨハネ 15:5 でイエスは言われました。「私はぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」私たちがイエスにとどまり続けるなら、イエスからいのちの養いを受け、イエスの実を私たちの人生を通して結ぶことができます。イエスにとどまるために必要なことは何でしょうか。それは祈りとみことばです。先週のペンテコステ礼拝でも見たように、聖霊は私たちの祈りを助け、みことばの真理を教えてください、みことばを行う力を与えてくださいます。またキリストのからだである教会につながることを通してイエスにとどまることができます。教会で共に礼拝し、交わり、奉仕や伝道をするを通して、私たちは自らイエスの養いをいただき、そしてイエスの実を結ぶことができます。自分で頑張っている行いの実を結ぼうとすれば、途中で疲れてしまいます。そうではなくイエスにとどまる信仰を持つことです。そうすれば、イエスが私たちの人生を変えてくださり、良い行いの実を結ぶ人生にしてくださるのです。生涯イエスにとどまって、良い行い実を結ぶ生きた信仰、役に立つ信仰を持つ者となりましょう。

ヤコブ2章20節～26節から「信仰と行いの関係」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 信仰義認

今日の箇所は、信仰と行いの関係についてのヤコブの中心的な教えが記されています。この箇所だけを読むと、一見ヤコブは信仰義認の教えを否定しているように思うかもしれませんが、しかし、実際はそうではなく、ヤコブは信仰義認を信じて、その上で、信仰生活における良い行いの必要について教えているのです。今日の箇所を整理して理解するために、まず第1の点では救いの始まりにおける信仰義認の教えについて見てみましょう。

信仰義認の教えは、ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙でパウロによって明確に教えられています。ローマ3:20-24にはこうあります。「なぜなら、人はだれも、律法を行うことによって神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」

「義と認められる」という言葉は、もともとは聖書時代の裁判での用語でした。裁判官が被告人に対して無罪を言い渡す時、「義と認める」と言いました。あなたは正しいと認められるので、無罪だと言いだしたのです。そのことばが聖書においては神との関係において用いられるようになりました。即ち、義と認められるとは、神の前に正しい人と認められ、神に受け入れられている状態のことです。新約聖書の時代、律法主義者と言われる人たちは、律法を行うことによって神の前に義と認められ、神に受け入れられ、救われると教えました。律法とは聖書の教えのことです。聖書の教えをきちんと守り行えば救われる、即ち人は行いによって義と認められ、神に受け入れられ救われると教えたのです。

それに対してパウロは教えました。「どんなに良い行いをしても、それによって私たちの罪がなくなるわけではない。私たちの罪が赦され、神の前で義と認められるのは、十字架で私達の罪を贖ってくださったイエスを信じる信仰のみによる」と教えました。もし、私たちが自分の行いによって救われるのなら、イエスは十字架で死ぬ必要はなかったのです。人は行いによって義と認められないので、神は私たちを救うために救い主イエスをお送りくださいました。そして、イエスが私たちのすべての罪を負い、十字架で神のさばきを身代わりに受けて罪の贖いを成し遂げてくださったのです。ですから、私たちの罪が赦され、神の前に義と認められて救われるためには、イエスを信じる信仰だけが必要なのです。これは聖書が教える救いの根本です。

パウロもヤコブもこの信仰義認は、信仰の父と呼ばれるアブラハムが経験したことだと教え、創世記15:6を引用して教えています。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」アブラハムは75歳になって、まだ子供がいない時に神から、「あなたの子孫は空の星のように多くなる」と言われました。その時、アブラハムは神を信じたのです。そして、アブラハムは信仰によって神の前に義と認められたのです。そして、その信仰義認はやがて、イエスを救い主と信じるすべての者に与えられるようになったのです。ですから、聖書は一貫して、神の前に罪が赦されて義と認められるのは、救い主イエスを信じる信仰によると教えていることを確認しましょう。信仰義認は一方的な神の恵みです。この神の恵みを私たちは信仰によっていただくのです。「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」信仰義認という神の恵みに心から感謝しましょう。

2. 行いによる義の意味 20-25

私たちの救いは信仰義認から始まります。パウロは救いの始まりについて教えているのに対し、ヤコブは救われた後の信仰生活について教えています。もし、ある人がイエスを信じて救われたと言いながら、その人の生活が救われる前と全く変わらず、罪の生活を続け、良い行いの実を全く結んでいなかったらどうでしょう。もしそうであればその人の言う信仰は、本当の信仰ではなく、口先だけの信仰、頭だけの信仰ではないか、自分にも人にも役に立たない無益な信仰ではないかとヤコブは言うのです。20「ああ愚かな人よ。あなたは、行いのない信仰が無益なことを知りたいのですか。」そしてまずアブラハムを例に挙げて、行いの重要性を教えました。21-24「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義と認められたではありませんか。あなたが見ているとおり、信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。『アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた』という聖書のことがば実現し、

彼は神の友と呼ばれたのです。人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」

アブラハムが信仰によって神の前に義と認められてから約 30 年が過ぎました。その間に、神の約束どおり、アブラハムとサラの間に息子イサクが与えられました。神の約束によればイサクの子孫は星のように多くなるのです。ところが、神はそのひとり子イサクを全焼のささげ物として献げよと命じられました。このことは創世記 22 章に記されています。アブラハムはこの神の命令に動揺したに違いありません。さらにイサクをささげれば神の約束はどうなるのかとの疑問も覚えたでしょう。けれども、ヘブル 11 章によれば、アブラハムは神は人を死者の中からよみがえらせることもできると考えたのです。そして、実際に祭壇でイサクを屠ろうとしたその時、神は「その子に手を下してはならない」と言われたのでした。そして、イサクの代わりに全焼のささげ物となる雄羊を備えられたのでした。この出来事は、アブラハムの信仰を試すための神のテストでした。そして、アブラハムは行いによって自分の信仰を完全に表したのです。

アブラハムは信仰によって義と認められました。そして、その信仰は彼の行いによって完全に表されたのです。ですから、ヤコブがここで 3 回「行いによって義と認められる」と言っている意味は、「信仰生活の中では行いを通して、義と認められた信仰が表される」ということです。救いの始まりは信仰によって義と認められる。そしてその信仰が本物であることは、信仰生活における行いによって表されるということです。もし、信仰生活の中で神に従う行いがなければ、その人の信仰は口先だけの信仰、頭だけの信仰であり、信仰義認の信仰ではないということです。その意味でヤコブは「人は行いによって義と認められる」と言っているのです。

ヤコブはもう一人、行いによって信仰を完全に表した人を例に挙げています。それはアブラハムとは対照的なラハブです。アブラハムは信仰の父であり、神の友と呼ばれた人です。一方、ラハブはエリコに住む異邦人の遊女でした。25「同じように遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので、その行いによって義と認められたではありませんか。」ヨシュア記 2 章を見ると、イスラエルがエリコを攻める前に 2 人の人を偵察するためにエリコに送りました。その時、ラハブは 2 人をかくまい、自分は主がエリコを滅ぼすことを知っているの、私と家族を救ってくださいと申し出ました。その時、ラハブは「あなたがたの神、主は上は天において、下は地において神であられるからです」と信仰の告白をし、その信仰を二人の使者をかくまい、彼らを別の道から逃すという行いによって表したのです。このように本物の信仰には行いが伴うのです。ラハブとその家族はその後、二人の使者によって助けられ、ラハブはサルマと結婚し、その子孫からやがてダビデが生まれ、さらにイエスが生まれるのです。このように「人は行いによって義と認められる」とは、「信仰生活の中では信仰義認の信仰は行いによって表される」という意味であることを覚えましょう。

3. 死んだ信仰と生きた信仰 26

26「からだは霊を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いを欠いては死んでいるのです。」聖書は人間の死とは体から霊が離れることだと教えています。体と霊が一緒にある時、人は生きているのです。同様に、行いを伴う信仰は生きており、逆に行いのない信仰は死んでいるのです。死んだ信仰とは口先だけの信仰であり、頭だけの信仰です。死んだ信仰は、信仰義認の経験も新生の経験もないので、行いの実を結ばないのです。一方、生きた信仰は信仰義認と新生の経験によって救われたので、その人は必ず良い行いの実を結ぶのです。エペソ 2:10 にはこうあります。「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

ですから、キリストにあって義と認められ、新しく造られた人は、神が備えてくださった良い行いに歩むことができます。もちろん、私達の信仰は完全ではなく未熟なので、私たちの行いも未熟であり、欠けの多いものです。けれども、信仰の成長に従って、行いも徐々に成長していきます。そのことによって、その人の信仰が本物の生きた信仰であることが表されるのです。私たちはイエスを信じて救われた時に、信仰が完成したのではなく、そこから始まったことを覚えましょう。そして、良い行いの実を結ぶために、ぶどうの木であるイエスにしっかりとどまり、みことばの栄養を十分にいただき、祈りの呼吸を絶やさず行いましょう。そうすれば、必ず良い行いの実を結ぶことができます。なぜなら、神は私たちが良い行いをするという目的のために新しく造りかえてくださったからです。信仰義認の救いの恵みに心から神に感謝し、良い行いの実を豊かに結ぶ信仰生活を歩みましょう。

聖書朗読 ヤコブ3章1節～6節 各自で今日の聖書の箇所を読みましょう。

説教 「ことばの力」 声を出して朗読してください。

ヤコブ3章1節～6節から「ことばの力」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 教師への警告 1

3章からヤコブは私たちの言葉、舌の問題について教えています。それまで、みことばを行うことの重要性を伝えてきましたが、行いの中に言葉が含まれているとヤコブは教えています。私たちは行いというと手足を動かすことを想像しますが、口で語ることも行いなのです。そして、言葉は良くも悪くも大きな影響を与える力があるのです。1節では言葉をもって教える教師について教えています。1「わたしの兄弟たち。多くの人が教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。」教会の教師不足が叫ばれるこの時代に、この教えはどうかと思うかもしれませんが、この教えは今も昔も真実です。初代教会の時代、教会の教師は尊敬されていたので、自分もなりたいたと願う人が多くいました。けれども、ヤコブは教師になりたいと願う人に対して、待ったをかけました。

教会の教師・牧師になるためには、まずなによりも神の召命が必要です。神が自分を教師に召してくださったという確信がなければ、決して教師を続けることができません。次に教師としての賜物が必要です。人を教えることができる能力が教会や神学校を通して認められなければなりません。また、みことばの教師となるための訓練が必要です。神学校における訓練と教会における訓練、教団における訓練を経て整えられる必要があります。そして、最終的に教団による補教師試験を受けて合格して初めて補教師となり、さらに3年の補教師の働きを経て、試験に合格して按手礼を受けて正教師・牧師となります。初代教会では今日のような教師の養成課程はありませんでしたが、教会による訓練と承認が必要でした。

ヤコブはさらにここで教師の言葉の責任について教えています。教師はみことばを教える者としての大きな責任があります。自分が語ることは教会員に大きな影響を与えます。ですからⅡテモテ2:15のみことばを絶えず覚えて最善を尽くす必要があります。Ⅱテモテ2:15「あなたは務めにふさわしい人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに解き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるように最善を尽くしなさい。」さらに、教師が気を付けなければならないのは講壇から降りた後の言葉です。普段の会話の中で失敗をしてしまい、言葉によって人を傷付けてしまうことがあります。そうであれば、「みことばを行う人になりなさい」と説教しながら、自分がみことばを行っていないことになります。みことばを語る者がみことばを行わないならば、より厳しいさばきを受けることになるのです。だからヤコブは、多くの人が教師になってはいけなと教えたのです。

しかし、そうであればだれが教師になれるのでしょうか。厳しくさばかれる者にだれがなりたいたと思うのでしょうか。人間的な判断ではだれも教師になるのにふさわしい人はいないでしょう。しかし、神は無きに等しいものをあわれみ、召してください、訓練を与えて教師として立てられるのです。そして、失敗を繰り返しながらも神の訓練を受けつつ、成長し、教師としての働きを全うしていくことができるのです。教師は特に語るべき言葉において注意し、神の警告を真摯に受け止めていかなければなりません。このように神の前に重い責任を持つ教師を、主が起こしてくださるようにと祈りましょう。

2. ことばの制御 2-5

2節からは教師だけでなくすべての信徒にとって、言葉を制御することの大切さを教えています。2「私たちはみな、多くの点で過ちを犯すからです。もし、ことばで過ちを犯さない人がいたら、その人はからだ全体を制御できる完全な人です。」口は災いの元と言われますが、私たちは言わなければよかった一言で失敗をしてしまいます。言葉で失敗をしない人はだれもいないでしょう。そして、口から出る悪い言葉は、悪い行動となって広がります。けんかはたいてい言葉の言い合いから始まり、やがてエスカレートして手が出るようになります。一方で、もし私たちが自分の語ることばをきちんと制御し、語るべきことは語り、語ってはならないことは語らないようにできるならば、からだ全体を制御できる完全な人になるのです。完全な人とは信仰の成熟した大人のクリスチャンになることです。3節4節は馬と船の例を通して、かなめとなる小さな部分を制御することによって、全体を正しく動かすことができると教えています。

3「馬を御するためには、その口にくつわをはめれば、馬のからだ全体を思いどおり動かすことができます。」現在もエンジンの力を馬力で表しますが、馬は力持ちで足も速い動物です。この馬を思いどおりに走らせるためには、馬の口にくつわを付け、くつわに手綱を付けてそれを上手に動かせば、馬は自分が行きたい方向に走ります。4節は船の例です。「また船を見なさい。あのように大きくて、強風を受けていても、ごく小さい舵によって、舵を取る人の思い通りの所へ導かれます。」船は馬よりもずっと大きいものです。しかも船は強風を受ければどんどん流されていきます。けれども、小さな舵によって

舵を取る人の思い通りの所に導くことができるのです。同じように、もし私たちが小さな器官である舌を正しく制御するのなら、からだ全体、生き方全体を正しく導くことができるのです。ところが、舌を制御できなければ、私たちの生き方全体が悪い方向に向かってしまいます。5「同じように、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って自慢します。あのよう小さな火が、あのよう大きな森を燃やします。」小さな舌が大きなことを言って自慢することは悪い例です。小さな焚火やたばこの火をちゃんと消さなかったばかりに、大きな山火事に発展することがあります。これも悪い例です。私たちはそのようになってはいけません。

では、私たちはどのようにすれば、自分の舌を、自分のことばを正しく制御することができるでしょうか。実は舌を制御するためには、私たちの心を制御しなければならないのです。言葉は私たちの心から出て来るものなので、心が聖くならないければ、私たちの言葉も良い言葉にならないのです。マタイ 12:34-35 でイエスは言われました。「まむしの子孫たち。お前たち悪い者に、どうして良いことが言えますか。心に満ちていることを口が話すのです。良い人は良い倉から良い物を取り出し、悪い人は悪い倉から悪い物を取り出します。」 またマタイ 15:18 では「口から出るものは心から出てきます」とも言われました。ですから、私たちの心がきよめられて良い心となれば、口から良い言葉が出て来て、言葉を正しく制御することができるのです。その結果、私たちの生き方全体を正しい方向に制御することができるのです。ではどのようにしたら、私たちの心がきよく良いものとなることができるのでしょうか。それは私たちの心が御霊に満たされることです。御霊に満たされるとは、御霊に支配されることです。真理の御霊が教えてくださるみことばの真理に従って歩むことです。そうすると、聖霊なる神が私たちの心を支配して下さり、御霊の実である自制をいただいて、自分の心を正しく制御できるようになります。その結果、口から出る言葉も正しく制御することができるのです。私たちの人生全体を正しい方向に導くかなめの場所は私たちの心です。心を正しく制御できれば言葉も正しく制御することができます。そのために「私の心をきよい良い心にしてください」と神に切に祈りましょう。そして御霊に満たされ、みことばに従っていく信仰者となりましょう。

3. 不義の世界 6

6 節は制御されない舌がもたらす悪影響について教えています。6「舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあって体全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。」舌は火ですとは、小さな火が大きな森を燃やすほどの悪影響を及ぼすということです。では「舌は不義の世界です」とはどういう意味でしょうか。不義の世界とは、神に罪を犯し、墮落した罪人の世界のことです。人間が罪を犯した結果、人間の言葉も罪深いものとなってしまいました。言葉の暴力は身体的暴力と同じように、あるいはそれ以上に相手を苦しみ傷つける力があります。SNS 上での相手の人格をさげすむ言葉の暴力によって、多くの人が苦しみ、いのちを失う結果も招いています。

また、悪い言葉はそれを受ける相手に悪影響を及ぼすだけでなく、言っている本人が悪影響を受けます。「舌は私たちの諸器官の中にあって体全体を汚し」とは、悪い言葉はその人の人格と生活全体に悪影響を及ぼすということです。そして「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法と正反対の生き方をするようになり、罪の奴隷となってしまいます。「人生の車輪を燃やして」とは、その人の将来に至る人生全体に悪影響を及ぼすということです。そして、最後には「ゲヘナの火によって焼かれます。」舌は火ですと言われますが、舌がもたらす火はとうとうその人全体をゲヘナの火で焼かれるまでの悪影響を及ぼすのです。イエスはマタイ 12:36-37 で言われました。「わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益な言葉について、さばきの日に申し開きをしなければなりません。あなたは自分の言葉によって義とされ、自分の言葉によって不義に定められるのです。」

私たちはどうでしょうか。今までの自分の言葉による失敗と罪を振り返るならば、誰も神のさばきは免れないでしょう。なぜなら、神の前にはすべての人が罪人であり、不義の世界の中で生きて来たので、言葉の罪も犯してきたのです。しかし、そんな罪人の私たちのための福音があります。それは主イエスの救いです。イエスの十字架の贖いです。私たちが自分の罪を悔い改め、イエスを自分の救い主として信じるなら、神はどんな罪も赦して下さいます。そして、私たちの心に助け主聖霊を与えて下さいます。私たちが聖霊の助けをいただき、聖霊に満たされる人生を歩むなら、少しずつクリスチャンとして成長し、聖霊によって心がきよめられ、言葉を正しく制御する者に変えられていきます。そして、人の益となる言葉、励ましの言葉、慰めの言葉、徳を高める言葉、愛の言葉を語る者となることができるのです。言葉を制御するためにはどうしても神の助けが必要です。主の助けをいただいて心がきよめられ、人の益となり自分の益となる良い言葉を語る者となりましょう。

ヤコブ3章7節～12節から「心を新たに」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 舌を制する 7-8

ヤコブは信仰生活の中で行いの大切さを教えています。そして3章では、行いには言葉が含まれていることを教えています。私たちの語る言葉は行いの重要な部分を占めているのです。手足を動かして行動することだけが行いではなく、語ることも行いなのです。良い言葉を語れば良い行いとなり、悪い言葉を語れば悪い行いとなります。そして、すべての人にとって、自分の言葉を制御することがいかに難しいかを、ヤコブは教えてきました。今日はその続きです。

7「どのような種類の獣も鳥も、這うものも海の生き物も、人類によって制することができ、すでに制せられています。」創世記1:28で、神は人に対して「生めよ。増えよ。地に満ちよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」と言われました。このみことばは文化命令とも呼ばれ、神は人間をこの地の管理者として、被造物を神のみこころにかなって治めるようにと命じられたです。そしてそのとおり、人間はすべての動物を治めることができ、現に治めています。もちろん、神のみこころにかなって治めているかと問われれば、そうでないことも多くあります。自然界を支配する意味を取り間違えて、人間の利益を優先して支配してきた結果、自然が破壊され、多くの動物が絶滅し、今も絶滅危惧種がたくさんいます。そして、自然破壊は温暖化を生み、災害が増え、人間も被造物も困難な状況になっています。2030年までの温暖化対策がその後の未来を決めると言われていますので、私たちもできることを行いたいと思います。

さてヤコブは、人間はあらゆる動物を制することができるのに、自分の舌を制することができていないと8節で教えます。「しかし、舌を制することができる人は、だれもいません。舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。」「舌を制することができる人は、だれもいません。」とは例外はないということです。6節で「舌は不義の世界です」とありましたが、すべての人が神の前に罪を犯した結果、この世は不義の世界となりました。その結果、すべての人は自分の舌を制することができなくなり、悪い言葉を語るようになってしまったのです。もちろんこのみことばは、舌を制することができる人はだれもないのだから、舌を制することをあきらめなさいと言っているわけではありません。そうではなく、だからこそ舌を制することの大切さを意識し、どうすれば舌を制し、悪い言葉は語らず良い言葉を語るができるのかを考えなさいと教えているのです。

「舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。」毒舌という言葉もありますが、舌を制御しなければ、私たちは絶えず悪い言葉を話し続けてしまいます。人を卑しめ、否定し、恐怖を与える言葉を語り続ければ、その人を死に追やることも起こるのです。私たちは自分の語る言葉の影響力の大きさを意識しているでしょうか。ヤコブは、言葉のもたらす悪影響の大きさを私たちが意識するために、言葉の悪の面を教えているのです。まずは、口は災いの元であることを十分意識しましょう。そして、語るべきことは語り、語ってはならないとは語らないように注意しましょう。

2. 舌の二面性 9-10

ヤコブは続けて舌の二面性について語ります。9-10「私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間をのろいます。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち。そのようなことがあってはなりません。」ここでは神を「主であり父である方」と呼んでいます。主は神の権威と支配を表し、父は神の愛と親しさを表す言葉です。クリスチャンは、すべての権威をもって世界を支配しておられる主なる神を、親しい天の父として持つことができました。それは神が私たちを愛して、ご自身のひとり子イエスを救い主としてお与えくださったからです。私たちはイエスの十字架の死によって、すべての罪が赦されて、神の前に義と認められ、神の子とされた結果、主を父と呼んで心からの賛美をささげます。コロナが収束すれば、礼拝の中でもっと主を賛美したいと思います。神をほめたたえることこそ、私たちの舌が果たすべき第一の役割です。

ところが神を賛美する舌が、今度は人を呪うという悪を行うのです。「呪う」という言葉を広く理解すれば、人の悪口や人を傷つけることを言うことも含まれるでしょう。そうであれば、すべてのクリスチャンに当てはまるのではないのでしょうか。私たちは日曜礼拝に出席して主を心からほめたたえます。そして、感謝を持って家に帰ってから、今度は夫婦げんかや親子げんかを始めるということは、だれにでも起こり得るのです。ここでは人間のことを「神の似姿に造られた人間」とあります。これは創世記1:27の「神は人をご自身のかたちとして創造された」という人間の創造に基づいています。

他の動物にはない神のかたちが人間にはあり、神の似姿に人間は造られているのです。ですから、人間には神のかたちとしてのいのちと人格の尊厳があるのです。もし、私たちが周りの人の姿に神のかたちを見ることができれば、私たちの言動はもっと変わるのではないのでしょうか。一人ひとりが神のかたちとして造られていることを知れば、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」というイエスの言葉も理解できると思います。もし、自分の話す相手にイエスの姿を見れば、私たちの言葉も行いもどんなに良いものにも変わることでし

ようか。さらに神の似姿に造られた人間をのろうことは、神ご自身をのろうことになるのです。そうすると私たちの口からは神への賛美と神へののろいが、一緒に出て来ることになるのです。ヤコブは「私の兄弟たち。そのようなことがあってはなりません」と言って私たちを戒めます。さらに11-12節で3つの例をもって、私たちの舌の二面性の矛盾を教えます。第3の点でそのことを見ていきましょう。

3. 心を新たに 11-12

一つ目の例は泉のたとえです。11「泉が、甘い水と苦い水を同じ穴から湧き出させるでしょうか。」「ほたるこい」の歌に「あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ」とあります。一つの泉から苦い水も甘い水も両方出ることはあり得ません。それなのに、人間の口からは良い言葉も悪い言葉も両方出て来ます。二つ目の例は木と実の例です。12a「私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくをならせたりすることができるでしょうか。」それはできないことです。いちじくの木にはいちじくがなり、オリーブの木にはオリーブがなり、ぶどうの木にはぶどうがなるのです。それなのに、クリスチャンの舌はどうでしょうか。ヤコブは「私の兄弟たち」と呼び掛けているので、クリスチャンの舌、クリスチャンの言葉について問いかけているのです。三つ目の例は塩水の例です。12b「塩水も甘い水を出すことはできません」現在では海水から塩を取り除いて飲料水を作る機械がありますが、塩水そのままから甘い水すなわち飲み水を出すことはできません。塩水はそのままでは、いくらたっても塩水なのです。

ではこれらの例は何を教えているのでしょうか。先週も学んだように、舌の問題、言葉の問題は本質的には心の問題であるということです。良い心からは良い言葉が出、悪い心からは悪い言葉が出て来ると言うことです。ではクリスチャンの心から賛美と呪いが、良い言葉と悪い言葉が一緒に出て来るのはどうしてでしょうか。それは私たちの心には、イエスによって救われて、神を信じ、神を愛する良い思いが与えられたが、まだ救われる前の悪い思いも残っているということです。クリスチャンは地上にあってはまだ救いは完成しておらず、進行中だということです。

パウロはローマ7章で、自分は救われてはいるが、自分のうちにはまだ罪があるので、自分がしたくない悪を行ってしまうと告白しています。そして、ピリピ3:12でこう言っています。「私は、すでに得たのではなく、すでに完成されているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」救いの完成に向かって進んでいる、これがパウロの信仰の状態であり、私たちの信仰の状態です。その状態のことを聖化と言います。聖化は聖なるものと変えられていく救いの成長過程です。

私たちの語る言葉にも聖化が必要です。きよめられていかなければならないのです。そして、そのためには心がきよめられ続けなければなりません。クリスチャンは救われても罪の性質が残っているので、きよめられ続けなければなりません。パウロはローマ12:2で聖化について次のように言っています。「この世と調子を合わせては行けません。むしろ心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるかを見分けるようになります。」「自分を変えていただきなさい」は継続の意味があり受身形ですので、「神によって自分を変え続けていただきなさい」と言う意味です。そして自分が変えられるのは心を新たにすることによってだと教えられています。クリスチャンはまだ救いが完成していないので、心が日々新たにされ、変えられ続けなければならないのです。そして、神が私たちを変え続けてくださるのです。

神のみこころは、良いことであり、神に喜ばれることであり、完全です。そのようなことに心を留め、それを実践していくことによって、私たちは変えられ続けていきます。人の考え方にはそれぞれ癖があると言われる。バイブルカフェの学びの時に、ビデオ講師のアメリカ人宣教師が、「世界中いろんなところに行ったけれども、日本ほど否定的に物事を考える国はない」と言われたことに驚きました。この先生は日本で生まれ育ち、日本とアメリカ両方の学校で学ばれたので、日本のことをよく知っておられます。日本の小学校で学んでいた時に、何かにつけ先生からよく注意されたそうです。日本人は気づかないうちに、人の悪い所を見つけて注意するという癖があるのかもしれません。そのような考え方の癖をもって子どもを育て、注意ばかりすれば、子どもは自信を無くしてしまうでしょう。逆に、子どもの良い所を見つけて、ほめてあげる癖を親がつけば、子供は自己肯定感をもって成長することができるでしょう。良い考え方の癖をつけば良い言葉を語ることができます。

また、良い言葉を意識的に語り続けると、それが良い心を育てることもつながります。感謝、感謝と言い続けていけば、心は感謝に満ちてきます。反対に、文句ばかり言っていれば、心は不平不満のかたまりになっていきます。私たちは失敗をしますが、神は私たちの心を変え続けてくださいます。ですから、悔い改めと信仰を持って、私たちの心を神によって日々新たにしていきたいと思います。そして、神を賛美し、同時に人の益となる言葉を語る者とならせていきたいと思います。

ヤコブ3章13節～18節から「二つの知恵」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 知恵と行い 13

ヤコブは、信仰は行いによって表されると、この手紙で繰り返し教えてきました。そして、今日の箇所では知恵も行いによって表されると教えています。まず13節を見てみましょう。「あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。」ヤコブは、「あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。」と尋ねますが、それに対して、「はい、はい、私です」と答える人が結構いたのです。当時は「知恵のある人」は教師を指し、「分別のある人」は学者を指していました。ヤコブは、3:1で「多くの人が教師になってはいけません」と言って、教師はことばを正しく制御できる人でなければならないと教えました。そして、13節では、教師は知恵を行いによって示す人でなければならないと教えているのです。

知恵と知識は違う要素があります。知識は頭の中での理解が中心です。知識人は物知りです。様々なことを理解して知っているのです。試験を受ければ、良い得点を取ることができるでしょう。一方、知恵は頭で知っている知識を、生活の中で生かして用いる力です。ですから、ヤコブは知恵があると言うなら、知恵にふさわしい行いをしなさい。そして、生活の中で知恵を示しなさいと教えたのです。では知恵にふさわしい行いとは何でしょうか。13節では「柔和な行い」であると教えています。柔和とはへりくだり、謙遜を意味する言葉です。謙遜なので心優しくふるまうことができるのです。イエスは「柔和な者は幸いです。その人は地を受け継ぐからです」と言われましたが、柔和は神の民の特徴の一つです。またイエスご自身が「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」と言われました。

教師にとっての落とし穴の一つは高慢です。自分は聖書のことをよく知っている、神学的に説明できると心高ぶるのです。その結果、自分に従えと権威主義になったり、こうしなければならぬと言って不寛容になり、人をさばいたり、意見が違ふ人と分裂したりする危険性があるのです。しかし、それでは本当の知恵を持っているとは言えません。牧師にとって大切なのは謙遜である、ある先輩牧師から聞きましたが、柔和こそ知恵にふさわしい行いなのです。さらにその「柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい」とヤコブは教えます。立派な生き方とは良い生き方であり、だれが見ても立派だと言える生き方です。Ⅱテモテ3章でパウロは監督は「教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません」と教えていますが、立派な生き方を示すことによって、評判の良い人となることができます。

13節は、教師になりたいと願う人に対して、またすでに教師になっている人に対しての、自己点検を促しています。高慢なところはないか、イエスのように柔和でへりくだっているか、単に悪いことをしないだけでなく、立派な生き方をしているかを探られます。「主を恐れることは知恵の初め」と箴言にあるように、本当の知恵は、主の前にへりくだり、主を認め、主に従うところから始まります。主を恐れる人は、高慢にならず、謙遜になります。ですから、いつも主を恐れるという知恵の初めに戻らなければなりません。このことは、教師だけでなくすべての信徒に当てはまるでしょう。私たちは、主を恐れる知恵を、柔和な行いにより、立派な生き方によって示していける者となりましょう。

2. 地上の知恵 14－16

ヤコブは信仰も知恵も行いによって表すことにより、本当の信仰、本当の知恵を持っていることを証明できると教えます。そして、14節からは知恵には本当の知恵もあれば、偽りの知恵もあると教え、二つの知恵の違いを教えます。本当の知恵は神からの知恵、上からの知恵です。一方、偽りの知恵はこの世の知恵、地上の知恵です。ヤコブは、あなたの持っている知恵はどちらの知恵かと問いかけ、本当の知恵の実を、生活を通して結ぶようにと教えています。まず、14－16は偽りの知恵である地上の知恵とは何かを教えています。「しかし、もしあなたがたの心のなかに、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのをやめなさい。そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。」

偽りの知恵についての様々なリストがあり、さっと読んだだけではわかりにくいですが、一つ一つ確認していきましょう。まず、偽りの知恵は「上から来たものではなく、地上のもの」です。上は神のことですから、偽りの知恵は神から来た知恵ではありません。では「地上のもの」とはどういうことでしょうか。地上とは神から離れた罪人の世界のことで、すべての人は神に背を向け、自分勝手に生きる者となった結果、神を無視して自己中心に生きる者となりました。ですから、地上の知恵は神を恐れる知恵ではないのです。さらに地上の知恵は肉적입니다。肉적とは私たちの罪の性質のことです。私たちはイエスを救い主と信じた時に、神によって新しく造られた者となり、神の子どもとしての性質が与えられました。その新しい性質は神を恐れ、神のみこころを喜び、神のみこころを行って、神の栄光を現したいと願います。

一方、私たちは救われた後も、以前から持っている古い性質を持ち続けています。それが肉の性質です。肉の性質は罪の性質です。神中心ではなく自己中心の性質です。私たちをみこころに反する罪を犯す方向に導き、実際に救われてからも罪を犯してし

まう原因となる性質です。地上の知恵は、私たちが罪の行いに向かわせる肉的なものなのです。さらに、地上の知恵は悪魔的なものです。悪魔は神に逆らうとともに、私たちを神に逆らうようにと誘惑します。ですから、悪魔的な知恵とは悪魔の誘惑によって、神に逆らう方向に向かう知恵です。

そのような地上の知恵は具体的にどのようなものでしょうか。六つ挙げられています。一つはねたみです。苦々しいねたみとも言われます。ねたみは、ほかの人が自分よりも優れている時に、その人をねたみます。ねたみは自分と人を比べるところから起こり、人のすばらしさをともに喜べない、自己中心な思いから出ています。ねたみはまさに苦々しい思いです。2つ目は利己的な思いです。これも自己中心から来る思いです。自分の利益を優先し、ほかの人のことを思いやらないのです。3つ目は自慢です。自分の優れたところ、よくできたことを誇る思いです。ここから高慢な思いが出てきます。神への感謝を忘れ、「誇る者は主を誇れ」と正反対な思いです。

4つ目は真理に逆らって偽ることです。本当の知恵は真理を求めます。イエスは「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」と言われました。イエスのうちに、神のうちに、神のことばである聖書のうちに、人間に必要な真理があります。ところが、この世の知恵は神に逆らうので、真理に逆らい、偽ってでも自己の利益を優先しようとします。5つ目は、秩序の乱れです。自己中心の思いが優先するので、争いが起こり、混乱するのです。6つ目はあらゆる邪悪な行いです。これは今までの5つの総まとめと言えるでしょう。地上の知恵によって生きれば、神に逆らい、罪を犯し、悪を行う結果となるのです。私たちの内にも、このような地上の知恵があり、その知恵によって生きることがあるのではないのでしょうか。しかし、それは神が願われることではありません。私たちは、もう一つの知恵である上からの知恵によって生きることが大切なのです。

3. 上からの知恵 17-18

17-18「しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実満ち、偏見がなく、偽善もありません。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって、平和のうちに蒔かれるのです。」上からの知恵とは、神からの知恵です。1:5 で「知恵に欠けている人がいるなら、神に求めなさい」とありましたが、神は私たちに正しい生き方に導く知恵を与えてくださいます。上からの知恵は主を恐れる知恵であり、神に喜ばれる行いへと私たちを導きます。ここでは具体的に9つ挙げられています。第1は清いものです。神の聖さを表し、罪から離れ、清い生き方へと私たちを導きます。2つ目は平和です。神との平和を土台として、人との平和を築いていきます。上からの知恵は、神との正しい関係の上に与えられるのです。そのために、イエスが下さる神との平和を信仰によって受け入れることが必要なのです。

3つ目は優しさです。寛容な心で人をねたまず、人との比較ではなく、神と私の関係を大切にします。4つ目は協調性です。利己的ではなく、他者のことも大切にして、争わずに協力します。5つ目はあわれみです。自分が神の大きなあわれみを受けたことを覚えて、隣人をあわれみ愛します。6つ目は良い実です。邪悪な行いではなく、良い行いの実を結ばせます。7つ目は偏見がないことです。人をえこひいきしたり差別せず、神のかたちとして造られた一人の人間として尊重します。8つ目は偽善がないことです。自分の利益を求めるために偽ることはせず、真理に生きようとします。

9つ目は義の実です。神が求めておられる義、正義をこの世に求め、正義の実を結ぶための種蒔きをします。ホセア 10:12 にはこうあります。「あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れ、耕地を開拓せよ。今が主を求める時だ。ついに主は来て、正義の雨をあなたがたの上に降らせる。」ホセアは、正義を成り立たせるためには、地道に正義の種蒔きをすることが大切だと教えました。あきらめずに正義の種を蒔き、主を求めれば、ついに主が来て、正義の雨を降らせてくださるのです。ヤコブも義の実を結ばせる種を蒔くことが、上からの知恵の行いであると教えます。そして、その種は平和をつくる人々によって、平和のうちに蒔かれると教えます。正義と平和は切り離せません。正義がない所に平和は築かれません。それは神との関係でもそうです。神の前に義と認められることなしに、神との平和は築かれないのです。そして人との関係においても正義が社会の中で行われる所に平和が築かれていきます。詩篇 85:10 には「義と平和は口づけします」とあります。山上の説教においてイエスは、神の民の特徴として、柔和とともに義もあわれみもきよさも平和も教えられました。神の民は平和をつくる人になる使命が与えられています。そのために、神は私たちに上からの知恵を与えていくくださるのです。

今日の箇所を読む時に、私たちのうちにはイエスによって救われた結果、上からの知恵が与えられていると同時に、罪人としての地上の知恵も同時に持っていることを覚えます。そして、神は神の民に対して、地上の知恵ではなく上からの知恵によって生きようへと教えておられるのです。自己中心の肉的な悪魔の願う地上の知恵を退けましょう。むしろ、神が下さる清い真理に基づく上からの知恵を求めましょう。そして、主の助けをいただいて、上からの知恵に生きる者となりましょう。

ヤコブ4章1節～5節から「三つの戦い」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 自分との戦い 1

詩篇133:1には「見よ。なんという幸せ、なんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになって共に生きることは」とあります。これは教会の交わりのすばらしさに当てはまるみことばです。ところが、教会は救われた罪人の集まりなので、みことばが教える理想の交わりからかけ離れた状態になることもあるのです。ヤコブは当時のローマ帝国中に散らばっている教会の中に戦いや争いがあったことを知り、争いの原因と解決法を教えています。今日の箇所では、私たちには三つの戦いがあることを教えています。第1の点では、教会の中での人との戦いの原因である自分との戦いを見てみましょう。

1「あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るものではありませんか。」ヤコブは教会の中に戦いや争いがあると云います。戦いという言葉は、ここでは武器を持って戦うという意味ではなく、対立、反目、敵対を意味しています。互いに対立し、仲が悪く、いがみ合って争うことが、残念ながら教会の中で起こっていたのです。ヤコブはそのような争いは「どこから出て来るのでしょうか」と問いかけます。そして、「ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るものではありませんか。」と言って人との戦いの原因は、自分のうちにある欲望にあると教えました。

欲望は、自分の楽しみや自分の願いをかなえようとする欲です。それはどこまでも自己中心の欲です。それが自分の体の中で、自分の心の中で戦っているのです。何と戦っているかということ、自分のうちにある神のみこころを行いたいと願う思いとです。別の言い方をすれば、自分の中で肉の思いと御霊の思いが戦っているのです。肉の思いは自分の欲をかなえたいと願う思いです。一方、御霊の思いは神のみこころをかなえたいと願う思いです。クリスチャンはイエスを信じた時に、心の中に助け主聖霊をいただきました。その結果、神の子どもとして新生し、父なる神のみこころを行いたいと願う新しい心が与えられました。ところが、クリスチャンには救われてもまだ、古い自己中心の欲である肉の思い、罪の思いが残っているのです。そして、この二つの思いが絶えず戦っていて、肉の思いが勝つと自己中心の行動に向かい、人との戦いを始めてしまうのです。

私たちに与えられた救いはまだ完成途上にあるので、肉の思いと御霊の思いの戦いが天国に行くまで続きます。天国に行くと、すべての罪がきよめられ、神のみこころだけを行う人に変えられるので、自己中心の欲望は消え去ります。しかし、それまでは自分との戦いは続くのです。そして、欲望との戦いに負け、罪を犯してしまうことがあります。そのような時、私たちは自分の罪深さを覚え、がっかりします。時には、自分は救われていないのではないかとさえ思うかもしれません。しかし、心配いりません。救われているから、欲望との戦いがあるのです。救われていなかったら、御霊の思いは心の中にないので、そもそも戦いもなく、肉の思いに生きてもがっかりすることはありません。救われているからこそ、私たちの心に戦いがあり、救いの完成までは敗北することもあり、その結果、人との戦いも行ってしまうのです。

私たちが自分の欲に負け、罪を犯した時は、自分の罪を悔い改め、主イエスの十字架を仰ぎましょう。そうすれば、主は私たちのすべての罪を赦してください。そして、次は戦いに勝利することを目指しましょう。私たちは自分の中にある欲望との戦いに負け続ける必要はありません。信仰の成長とともに、自分との戦いに勝利することができるのです。勝利する方法については第3の点で見ていきたいと思います。

2. 人との戦い 2-3

2a「あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。」といった、彼らは何を欲しがり、熱望したのでしょうか。一つは自分の考えや主張を通すことです。そして、別の考えや主張を持つ人を受入れられずに争うのです。二つ目はお金や富を求めることです。2章では富む人へのえこひいきと貧しい人への差別のことが記されていました。エルサレムで始まったばかりの教会は、迫害の中で互いに財産を共有し、助け合って生活する美しい愛の共同体でした。ところが、ローマ帝国中に離散して住むクリスチャンたちはそれぞれが私有財産をもって生活するようになりました。そして、この世の流れに従い、富への欲望に支配されるようになっていきました。5章を見ると金持ちたちは、貧しい労働者に支払う賃金さえも惜しみ、彼らを殺したとあります。それは暴力で殺すのではなく、貧しい人が食べることも困難になり、栄養失調や病気で死んでしまったということです。2節の「人殺しをします」もそのような意味が含まれていると考えられます。さらに、言葉や態度で相手を侮辱することも含まれているでしょう。三つ目は地位や名誉を求めることです。3章では教会の教師やリーダーになりたい人がかなりいたことが分かります。そして、互いに教会での地位や名誉を得ようと争っていたのです。イエスの弟子たちもだれが一番偉いかと互いに議論しました。

これらの欲は、今日の私たちにも当てはまります。私たちは同じ主イエスへの信仰を持っていますが、多様性を持っているので、様々な意見を持ちます。みんなが自己主張し、自分の意見を譲らなかったら、直ぐに争いが起こるでしょう。意見を出し合いながら、主のみこころを求めつつ、協調性をもって、より良いアイデアにまとめていく知恵が必要です。富や物に対する欲も注意する必要があります。物質主義や拝金主義というこの世の流れに、私たち一人ひとりも教会も陥らないようにしなければなりません。地位や名誉も誘惑ですから、気をつける必要があります。イエスが仕えるしもべとなられたように、私たちもしもべとして神と人に仕えるものとなりましょう。

さてヤコブは、なぜ自分たちが願う物を得ることができないのかを次に教えます。2b「自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」人に求めるのではなく、神に求めているかということです。「求めなさい。そうすれば与えられます」とイエスが言われたように、神に求めるなら必要な物は与えられるのです。でも、ある人は言うでしょう。神に祈っても与えられないと。それに対してヤコブは言います。3「求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。」ヤコブは祈りの姿勢を問います。それは神への姿勢でもあります。自分を第一とするのか、神を第一とするのかという信仰姿勢です。自分を第一とすれば私たちは「私の願いがかなえられますように」と祈ります。しかし、自分の欲望をかなえる祈りは聞かれないのです。一方、神を第一とすれば、「私の願いはこうですが、あなたのみこころがなりますように」と祈ることができます。そう祈れば、与えられれば神のみこころ、与えられないのも神のみこころ、神は私に最善のものを与えてくださると知って、神に感謝し、神にゆだねて生きることができます。そして、この神との正しい関係こそが、肉の思いに打ち勝つ方法なのです。

3. 神との戦い 4-5

4「節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」「節操のない者たち」は直訳は「姦淫を犯す女たち」です。これは旧約聖書で預言者が語った霊的姦淫のことです。神と神の民との関係は夫と妻の関係です。神の民が夫である神から離れ、偶像やこの世を愛するなら、霊的姦淫を犯しているのです。御霊の思いではなく肉の思いに従う者は、神を愛さず世を愛し、霊的姦淫を犯していることになるのです。世とは神に逆らう罪人の世界です。世を愛することは神に敵対し、神と戦っている状態です。神第一ではなく、自分第一の生き方です。しかし、そのような生き方は本当の満足を得ることはできません。私たちは自分の欲が一つ満たされたとしても、それで満足できず、直ぐに次のものを欲しがります。そのような生き方は、いつまでたっても真の満足を得ることができません。

本当の満足を得る生き方はマタイ 6:33 でイエスが言われた神第一の生き方です。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」神の国と神の義を第一に求めれば、神が与えてくださるものに感謝する生き方となります。与えられないものに不満をいだいたり、人から得ようとして争うことはなくなります。ヤコブは、クリスチャンは世を愛し、世の友となるのではなく、神を愛し、神の友となるようにと教えているのです。そして、神が私たちをどんなに愛しておられるかを5節で教えます。

5「それとも、聖書は意味もなく語っていると思いますか。『神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。』」神はクリスチャン一人ひとりの心に聖霊を与えてくださいました。聖霊は三位一体の第三位格の神であり、父、子、聖霊の神は永遠の愛の交わりを持っておられます。ねたみは人間関係では悪い意味で用いられることが多いですが、神の愛においては、ねたみは神の愛の強さと深さを表しています。父なる神は聖霊なる神をねたむほど慕っておられます。その愛する聖霊を私たちのうちに住まわせてくださったということは、私たちをもねたむほど愛しておられるということです。それほど神に愛されているにも関わらず、神に敵対し、世を愛し、世の友となれば、神はどれほど悲しまれるのでしょうか。逆に私たちをねたむほど愛しておられる神の愛を知り、私たちも神を愛し、神を第一として生きる者となれば、神はどれほど喜んでくださるのでしょうか。神を愛することが、神との戦いを終わらせる方法です。また、神を愛することが、肉の思いを第一とせず、御霊の思いを第一として、自分との戦いに打ち勝つための方法です。さらに、神を愛することが、人との戦いを終わらせ、寛容をもって相手を受け入れ、平和を築くための方法です。

私たちは日々神の深い愛を知り、神を愛する者となりましょう。そうすれば、神と戦うことなく、自分との戦いに打ち勝ち、人と戦うこともなくなります。そして、自分の欲をかなえる生き方ではなく、神のみこころになることを求める人になり、心満たされ感謝の人生を送ることができるでしょう。神の愛に応答して、私たちも神を愛し、神を第一とする人となりましょう。

ヤコブ 4 章 6 節～ 10 節から「さらに豊かな恵み」と題して 3 つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 神に従い、悪魔に対抗する 6-7

先週見ました 4:1-5 で、ヤコブはクリスチャンの中に争いがあることを指摘しました。そして、その原因はクリスチャンが肉の思いである自分の欲望に従って生きていることにあり、そのような生き方は世を愛し、神に敵対していると指摘しました。クリスチャンは救われても、御霊の思いと肉の思いが共存し、絶えず自分のうちで戦っているのです。そして、肉の思いが勝つ時、私たちは罪を犯してしまいます。しかし、私たちが罪を犯したとしても、神はなお私たちを愛しておられ、私たちが肉の思いに打ち勝ち、神を愛し、人との平和を築く者となるように願っておられることを学びました。今日はその続きです。

6『神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる』と。それでこう言われています。『神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。』『神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える』は、箴言 3:34 の引用です。私たちが救われたのは一方的な神の恵みによりました。「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」とあるとおりです。信仰は神の恵みを受け取る手です。イエスが十字架で成し遂げてくださった罪の贖いを私のためと信じ、お救いくださいと信じて祈るのです。すると、私たちの方で何もしなくても、価なし罪が赦され救われるのです。ですから、キリストの救いは一方的な神の恵みです。しかし、神の恵みはそれで終わるのではないのです。「神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる。」神の恵みは私たちの信仰生活においても尽きることがありません。私たちは救われてクリスチャンになってからも罪を犯してしまいます。その時も、神の恵みは尽きることなく私たちに与えられ、神は十字架の贖いによって、私たちの罪を赦してくださいます。そして、神を愛する者を日ごとに造り変えてくださるのです。クリスチャンは救われた後は、自分の力で頑張る成長するものではありません。そうではなく、神の恵みによって成長するのです。この神のさらに豊かな恵みを受けるためには、3 つのことが必要だとヤコブはここで教えています。

第 1 のことは、神に従い、悪魔に対抗することです。7「ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」「従う」は、ここでは服従を意味する強い言葉が使われています。神に対して全面降伏し、自己中心の思いを捨て、神の意志に全面的に従うことです。そして、神に従うことは、同時に悪魔に対抗することでもあるのです。悪魔は自ら神に敵対するだけでなく、私たちが神の敵として歩むように誘惑してきます。まず、私たちが神を信じず、イエスの救いも信じないように、あらゆる手段を用いて働きかけます。さらに、私たちがイエスを信じて、悪魔の支配から神の支配に移った後も、あきらめません。しつこく私たちに付きまとい、私たちが神に全面的に従わないように、私たちの肉の思いに働きかけ、罪を犯すように誘惑します。そして、私たちが信じてはいても、肉の思いを優先し、地上の知恵に従い、神に対抗する者となるように仕向けるのです。ですから、私たちが神に従うためには、悪魔に対抗しなければなりません。神に対して YES というためには、悪魔に対して NO とははっきりと言わなければならないのです。

クリスチャンはこのように霊的戦いの中にいることを意識しなければなりません。I ペテロ 5:8-9 にはこうあります。「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。」神は私たちが神に従い、悪魔に対抗するために神の武具を備えてくださっています。エペソ 6 章に神の武具のリストがありますが、その中でも信仰と神のことばと祈りの武具が重要です。神に信頼し、みことばに従い、御霊によって祈る時、悪魔に打ち勝ち、悪魔は逃げ去ると約束されています。イエスもみことばによって悪魔の誘惑に勝たれました。

また、神に従うことは、自分の思いを第一とするのではなく、神を第一として生きることです。マタイ 6:33 のみことばに従って生きることです。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」肉の思いは、これらのもの、すなわちこの世で必要なものを第一に求めようとします。救われる前は肉の思いだけに生きていたので、神を求めることはありませんでした。しかし、クリスチャンになると御霊の思いが与えられ、神を求めるようになります。けれども問題は、クリスチャンになっても肉の思いを優先させると、これらのものが第一で、神は第二になってしまいます。しかし、それでは悪魔の思うつぼです。悪魔は私たちが中途半端な信仰で満足するように誘惑しているのです。神を信じているだけでいいではないか。それ以上神に従う必要はない、自分の欲望のままに生きていいのだと私たちを誘惑します。その悪魔の誘惑に NO といい、私は神を第一としますと宣言するのです。そうすれば悪魔は逃げ去り、神に従う人生を歩むことができ、神は私たちにさらに豊かな恵みを与えてくださるのです。

2. 神に近づく 8-9

私たちが、さらに豊かな恵みを神からいただいて、信仰生活を歩むために必要な第2のことは、神に近づくことです。8「神に近づきなさい。そうすれば神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち。手をきよめなさい。二心の者たち。心を清めなさい。」神に近づきなさいと言うことは、神から離れている状態にあるということです。クリスチャンにとって神から離れている状態とは、罪を犯しているときです。クリスチャンはたとえ罪を犯したとしても、完全に神から離れてしまうことはありませんし、救いが失われることもありません。けれども、罪は私たちを神との親しい交わりから引き離してしまいます。ですから、ヤコブはそのような状態にあるクリスチャンを「罪人たち」と呼んでいます。また「二心の者たち」とも呼んでいます。二心とは、神に従う心と肉の思いに従う心の両方がある状態です。神を信じていても神を第一とせず、神に対抗して服従していないのです。そのような状態の者に対して、「神に近づきなさい」と教えています。そして、神に近づくとは具体的には悔い改めることであると教えているのです。「手をきよめなさい」とは、外側に現れる罪の行いをやめ、そこから離れることです。また「心を清めなさい」とは、心の内側にある肉の思いである自己中心の罪の思いを、キリストの血によってきよめていただくことです。

そして9節ではこの悔い改めを徹底しなさいと教えています。9「嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。」バツハのコラールに「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」という曲があります。この曲の元となった歌詞の讃美歌が教会福音讃美歌 124 番にあります。「人よ、汝が罪の大いなるを嘆き、悔いて涙せよ」と歌われます。これは心底神の前に自分の罪を悔い改めることです。9節の笑いや喜びは、この世の物質的なものが満たされた時の喜び、地位や名誉を得たり、自分の願いがかなったときの笑いや喜びです。それらの喜びはやがて消え失せるので、さらに得なければ笑いは続きません。それは神抜ききの笑いであり喜びです。そのような生き方を悔い改めて、神を第一に求めて神に近づくのです。そうすれば、神は私たちに近づいてくださり、神との親しい交わりの中に尽きることはない笑いと喜びが与えられるのです。放蕩息子は悔い改めて父のもとに帰った時、まだ遠くにいたのに、父の方から駆け寄って息子を受け入れました。私たちもいつでも悔い改めて神に近づくなら、神はさらに豊かな恵みをもって私たちに近づいて受け入れてくださるのです。

3. 主の御前でへりくだる 10

私たちが、さらに豊かな恵みを神からいただいて、信仰生活を歩むために必要な第3のことは、主の御前でへりくだることです。10「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」6節にも「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える」とありました。神の恵みをいただくためには神の前にへりくだる以外にありません。主の御前でへりくだるとは、神を信じ、自分の罪を悔い改め、主の十字架の贖いを信じて、主の恵みなしには、良き人生を歩めないことを神に告白することです。そして神に従い続けることです。そうすれば、神は私たちに必要な恵みを与えてくださり、神の恵みによって罪と悪魔に打ち勝ち、神を第一として歩むことができるようにしてくださいます。水は高い所から低い所に流れるように、神の恵みも神の前に低くへりくだる者のうちに流れるのです。

ザアカイがイエスを見ようといちじく桑の木に登り、イエスを上から見物しました。するとイエスは、「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」と言われました。その時、ザアカイは木から降りるとともに、高慢な心を捨て、へりくだってイエスをお迎えしたのです。そして、財産の半分を貧しい人に施し、奪い取った金は4倍にして返しますと、手をきよめ、心を清める決心をして悔い改めました。イエスはその姿を見て、「今日、救いがこの家に来ました」と言って、救いの恵みを与えられました。これは救いの時に与えられた神の恵みですが、クリスチャンになってから与えられる神の恵みも原理は同じです。神の前に、イエスの前に、高慢な思いを捨て、罪を悔い改めてへりくだることです。そうすれば、神はさらに豊かな恵みを与えて、私たちを受け入れ、主にある笑いと喜びを与えてくださいます。それが「主があなたがたを高く上げてくださいます」ということです。

主は恵み深いお方です。主の恵みは尽きることがありません。私たちが天国に行くまで、主はご自身の恵みによって私たちを支え続けてくださいます。だからこそ、私たちは何度でも主の前にへりくだって、罪を悔い改めて、主に近づき、主に従う決心をして、立ち上がることができるのです。自分の罪を数え上げればきりがありません。クリスチャンになってからみことばどおり行わないことが何度あったでしょうか。舌を制御できず、言葉の罪を犯したことが何度あったことでしょうか。穴があれば入りたい思いです。けれども、感謝なことに神の恵みは尽きることがありません。神はさらに豊かな恵みを備えてくださいます。ですから、恵みの神に信頼し、いつも主の前にへりくだって、主の恵みによって信仰生活を全うしましょう。

ヤコブ 4 章 1 1 節～ 1 7 節から「主のみこころであれば」と題して 3 つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 神への高ぶり 1 1－1 2

先週学んだ 4:6 には「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」とあります。さらに 4:10 にはこうあります。「主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」今日の箇所は、高ぶりとへりくだりの具体的な出来事が記されています。11-12「兄弟たち、互いに悪口を言い合ってはいいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。」

4:1 では教会の中に戦いや争いがあったことが記されています。この戦いや争いは互いに悪口を言い合い、さばき合うことによって起こっていました。ヤコブは、互いに悪口を言い合い、さばき合っている人は、「律法について悪口を言い、律法をさばいているのです」と言いました。ヤコブは 2:8 で最高の律法は「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」だと教えました。兄弟に対して悪口を言いさばく人は、最高の律法を守っておらず、律法は守らなくてもよいと自らの行いによって宣言しているようなものです。その人は、律法よりも自分を高い位置に置き、律法について悪口を言い、律法をさばいていることになるのです。さらに律法を定め、さばきを行うお方は神お一人です。律法をさばく者は、律法を定められた神よりも自分を高い位置に置き、神をさばいていることになります。隣人をさばく人は、神をさばく人となっているのです。隣人をさばき、神をさばくあなたは、いったい何者なのかとヤコブは、彼らの高慢を責めています。

私たちも聖書の教えを知っていながら行わないなら、聖書を与えてくださった神に対して高ぶり、神に敵対していることになります。聖書は神のことばであり、神に従うことは具体的には聖書に従うことです。聖書は私たちが神のみこころにかなって歩むために、この道に進めと教える人生の道しるべです。山道にはところどころに道しるべが立てられています。もし、道に迷ったら道しるべまで戻って、道しるべが示す方向に歩けばいいのです。人生においては、それは悔い改めです。私たちは聖書の教えの通りに生きようとします。ところが、時々道に迷い、みことばに反することをやってしまいます。その時は悔い改めて、みことばによって主が示してくださっている正しい道に戻って、その道に進めばよいのです。そのためには、神の前にへりくだって歩む必要があります。

現在祈禱会では、列王記と歴代誌にあるイスラエルの分裂王国時代の王様について学んでいます。どの王も完全な人はいませんが、ある王は預言者から罪を指摘されると、へりくだって悔い改め、主の道に戻って歩みます。別の王は預言者から罪を指摘されると腹を立て、主のことばを聞かず、預言者を迫害します。聖書は神の前に高ぶる王は神の祝福を受けず、神の前にへりくだる王が神の祝福を受けると教えています。私たちも同じです。みことばに反して生きていることを示されれば、今自分は神に対して高ぶっている状態であることを認めましょう。そして、すぐに主の前にへりくだって悔い改め、主の道に歩む者となりましょう。それが神に祝福される生き方です。

2. 主のみこころ 1 3－1 6

13-16 は商売人の言葉から、神の前の高ぶりとへりくだりを具体的に教えています。13『今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう』と言っている者たち、よく聞きなさい。』13 節の商売人は、一年間の計画を立て、商売して儲けようと考えました。計画を立てることは悪いことではありません。私たちも自分の人生の計画を立てます。仕事をする人は仕事の計画を立て、商売人は商売の計画を立てます。教会でも現在 40 周年に向けての計画を立てようとしています。問題は、彼らが自分で自分のいのちも自分の将来も決めることができていることです。いのちも将来も自分の手の中にあり、神ではなく自分が支配しているとの高慢な思いになっています。16 節はその彼らの高ぶりのことを言っています。16「ところが実際には、あなたがたは大言壮語して誇っています。そのような誇りはすべて悪いことです。」

ヤコブは 14 節で人のいのちについてこう言います。14「あなたがたには、明日のことはわかりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。」私たちは明日も生きているのが当然と思い、日ごろ自分の死をあまり考えないかもしれません。日本では死はタブーであり、オープンに話さないことがしばしばです。しかし、私たちはだれも明日のことはわかりません。夜寝る

時、朝目覚めるかどうかはだれもわかりません。健康であっても、いつ病になるかわからず、突然事故やわざわいにあっていのちを失うこともあります。ヤコブは私たちの人生を、朝には地面を覆うが太陽が出ると消えてしまう霧にたとえて、人生の短さを教えます。私たちの生死は神の御手の中にあるのです。それなのに、自分のいのちを自分で支配しているようにふるまうことは、神に対する高慢なのです。

では私たちは神の前にへりくだり、どのように自分のいのちと死を考え、計画を立てればよいのでしょうか。ヤコブは15節で教えます。15「あなたがたはむしろ、『主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう』と言うべきです。」自分の生死は、主の御手にあることを謙遜に受け入れ、主のみこころを第一に考えることです。主のみこころならば、私たちは一年後も生きています。また主のみこころならば、来年は天国にいますでしょう。自分の生死は主の御手の中にあることをいつも覚えることです。そして、自分のいのちを主にゆだねることです。

そのためには、私たちの造り主である神と救い主イエスを信じて、「生きるにしても死ぬにしても、私たちは主のものです」という確かな信仰を持つことが大切です。ローマ14:8「私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死にます。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」そして、主の御手に自分の人生をゆだねて、主のために計画を立てるのです。40周年の教会の計画も主のみこころが大切です。主のみこころであれば、私たちの教会はこの地にあることが許されて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と主の前にへりくだって計画を立てることが大事です。それは私たちの人生計画においても同じです。主のみこころこそ、私たちが第一にすべきことを覚えて、主に信頼して日々歩みましょう。

3. 行わない罪 17

17「こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。」私たちは悪いことを行うことは罪だと知っています。しかし、ヤコブは良いことを知っていながら行わないことも罪だと教えています。ある人たちはこう言うでしょう。「私は兄弟の悪口を言わず、さばくこともしていません。」それに対してヤコブは言うのです。「それはすばらしいことだ。でもあなたは隣人を愛するためにどんな良いことをしましたか。」もし何もしていなかったら、それは罪なのです。また、「私は主のみこころに自分の人生をゆだねています」という人もいます。それに対してヤコブは「それはすばらしい。では主のみこころにゆだねてあなたは何をしましたか」と問うているのです。もし、何もしていないなら、その人にとって罪なのです。

イエスはマタイ25章で「あなた方が、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことはわたしにしたのです」と言われました。そして次に「お前たちがこの最も小さい者たちの一人にしなかったのは、わたしにしなかったのだ」とも言われました。良いことを知っていてもしなかったなら、それは罪なのです。

聖書を通して神のみこころを知ることはすばらしいことですが、知れば知るほど神の前の責任も大きくなります。知っているのに行わないのは罪なのです。するとある人は言うでしょう。「それならば、知らないほうが良かった」と。しかし、主のみこころを聖書を通して知ることは、私たちにとって大きな祝福です。私たちは聖書を通して福音を知ったからこそ、イエスを信じ、永遠のいのちの祝福にあずかりました。また聖書を通して神の教えを知ったからこそ、神に喜ばれる正しい道に歩むことができます。私たちは神から多くの恵みをいただいています。その恵みに応えて生きることが、クリスチャンの使命なのです。神は私たちを通して、この世にみこころを行おうとしておられます。「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈る時、神は私たちを通して、この世でみこころを行おうとしておられることを覚えます。

だからこそ私たちは言うべきなのです。「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう。」このこともあのことも、主のためになる良いことです。聖書を通して教えられる神のみこころを具体的に行うための人のわざです。このこともあのことも、私たちが神の前にへりくだって祈り、与えられる計画です。みこころならそれを行うことができます。そして、神の栄光を現すことができます。それがクリスチャンに与えられている責任です。主のみこころにゆだねつつ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」という人生を歩んでいきましょう。

ヤコブ 5 章 1 節～6 節から「神に望みを置く人」と題して 3 つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 富に望みを置く人 1—3a

今日の箇所は、金持ちに対する警告です。1「金持ちたちよ、よく聞きなさい。迫りくる自分たちの不幸を思って、泣き叫びなさい。」聖書は金持ちになることが悪いことだとは言っていません。信仰の父アブラハムは富める人でした。同時に、神に信頼し、忠実に神に仕えました。一方、聖書はお金の誘惑を教えています。それは神よりも富に望みを置き、その結果、神から離れてしまうことです。ヤコブが 1 節で「金持ちたちよ」と呼びかける時、それは神に望みを置かず、富に望みを置いている人のことです。ですから、ここでの呼びかけは、基本的には未信者の金持ちのことだと考えられます。そして、クリスチャンの金持ちに対しても、もし神に信頼せず富に信頼するのなら、同じような不幸があなたがたにも来ると警告しているのです。

5 章の金持ちたちが、富に望みを置く人であることが分かるのが、彼らが必要以上に富を蓄えていたことです。2—3a「あなたがたの富は腐り、あなたがたの衣は虫に食われ、あなたがたの金銀はさびています。」聖書の時代、富を蓄える方法は 3 つありました。一つは穀物を蓄えることです。しかし穀物の富は蓄え過ぎるとやがて腐ってきます。2 つ目は衣服です。良い服は価値がありました。しかし、どんなに良い服でもやがて虫に食われて価値がなくなります。3 つ目は金銀です。実際は、金銀はさびることがありませんが、自分のために蓄えた金銀は、神の前にはさびて使いものにならないのです。これらの金持ちは十分富を蓄えているので安心し、これからも富が自分を守り支えてくれると信じていたのです。そして自分を守り支えてくださる神に背を向けて生きていました。もちろん、この箇所は、富を蓄えることが悪いことだと教えているものではありません。将来の必要のために貯蓄することは大切なことです。ここでヤコブが言っていることは、神に信頼せず、蓄えた富に信頼することの愚かさです。では金持ちたちはどのようにして富を蓄え、どのように使っていたのでしょうか。そして、その結果として、ヤコブが警告している迫りくる不幸とは何なのでしょう。第 2 の点で見ていきましょう。

2. 富に望みを置く生き方 3b—6

4a「見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。」金持ちたちは自分の富を増やすために、畑の刈り入れ作業をした労働者に賃金をちゃんと払わなかったのです。レビ 19:13 には「日雇い人の賃金を朝まで自分のもとにとどめておいてはならない。」とあります。また、申命記 24:15 では「その人の賃金はその日のうちに、日没前に支払わなければならない。彼は困窮し、それをあてにしているのだから。彼があなたのことを主に訴えて、あなたが罪責を負うことのないようにしなさい。」とあります。ところが、金持ちたちは自分の利益を優先して、賃金をきちんと支払わずに先延ばししたのです。そのため、労働者は困窮しました。

さらに 6 節を見てみましょう。6「あなたがたは、正しい人を不義に定めて殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。」労働者たちは金持ちたちに賃金を支払うように訴えました。すると金持ちたちは労働者たちを裁判に訴えたのです。裁判は金持ちたちのわいろにより、労働者を有罪としました。しかも労働者はお金がないので、それ以上抵抗することができません。その結果、彼らの中に栄養失調や病で死ぬ人も出て来たのです。金持ちたちは、このような不正によって金儲けをしました。

ではそのように不正によって得た富をどのように使ったのでしょうか。5a「あなたがたは地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり」彼らは蓄えた富を、ぜいたくに暮らし、快樂にふけるために用いたのです。彼らは自己中心で、自分の欲望を満たすためだけに富を用いました。毎日ご馳走を食べ、贅沢三昧に暮らし、この世の楽しみにお金を使ったのです。しかし、そのような生き方の結果は、どうなるのでしょうか。この世と永遠の世界に対して大きな影響を及ぼします。

まずこの世の生き方に大きな影響を及ぼします。5b「屠られる日のために自分の心を太らせました。」富に頼り、贅沢三昧の生活はからだを太らせるだけでなく、心も太らせました。心を太らせるとは、その人の心がますます富に頼り、神から離れて行くということです。イエスはマタイ 6:26 で言われました。「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」富を愛し、富を重んじ、富に仕える生き方は、神を憎み、神を軽んじ、神に仕えない生き方へとますます向かわせます。彼にとっては富が偶像となってしまうのです。

さらに富に望みを置く生き方は、永遠の世界に影響を与えてしまいます。5節の「屠られる日」とは、この世の終わりにある最後の審判の日のことです。3節にも「終わりの日」とありますが、これも最後の審判の日のことです。この日、神はすべての人に対するさばきをなさるのです。そして、神に信頼せず富に信頼した者は神のさばきを受けて永遠の滅びに至るのです。それが1節でヤコブが警告する「迫りくる自分たちの不幸」です。その日、彼らの不正で得た富、自分の贅沢と快樂のために蓄えた富は彼らを訴えます。3b「そのさびがあなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは終わりの日に財を蓄えたのです。」

また困窮した労働者たちの叫び声が訴えます。4b「刈り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。」地上で自分のために贅沢をし、貧しい人々を虐げ、神に背を向けて生きた人は、永遠の世界で神のさばきを受けることを覚えよとヤコブは警告しているのです。この警告に耳を傾け、富に望みを置かず、神のみ旨にかなう生き方をするためにはどうしたらよいのでしょうか。第3の点で見てみましょう。

3. 神に望みを置く人

富に望みを置かず、神のみ旨にかなう生き方は、神に望みを置く生き方です。Ⅰテモテ 6:17—19(p. 424)にそのことが教えられています。長い文章なのでまずⅠテモテ 6:17を読みます。「今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、」富は、私達の永遠の世界には頼りにならないものです。そんなものに望みを置くのではなく、私たちに永遠のいのちを与え、天国に入れてくださる神に望みを置くのです。神はこの世にあっても、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださるお方です。神に望みを置く人は地上にあって次のように生きます。18「善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え」ヤコブ 5 章の金持ちとは正反対の生き方です。自分に与えられた富を、神に喜ばれるために用い、分け与えるのです。そして、そのような生き方は天に宝を積むこととなります。19「来るべき世において、立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。」

いつの時代も人間にとって富は誘惑です。もっと欲しい、あれも欲しいこれも欲しいと願う貪欲は、私たちを神から引き離してしまいます。「貪欲は偶像礼拝です」とコロサイ 3:5にあります。2010年に開かれた第3回ローザンヌ世界宣教会議で出されたケープタウン決意表明は、世界のクリスチャンに対して貪欲に対する戒めを伝えています。世界の貧困問題についての解決についてはこうあります。「行き過ぎた富と貪欲を問いたすことなしには、世界は貧困という問題を解決することはおろか、それに取り組むことさえできない。世にはびこる消費至上主義という偶像礼拝に、福音は異議を唱える。私たちは富ではなく神に仕える者として、貪欲は貧困を永続化させるものだ」と認識し、貧困を容認しないように求められている。」さらに、「質素に歩み、貪欲に対する偶像礼拝を捨て去りなさい」と呼びかけ、「繁栄の福音」と呼ばれる偽りの福音への注意を呼び掛けています。「繁栄の福音」とはイエスを信じれば、健康と富を得ることができるという教えです。しかし、そのような教えは聖書にはありません。

このように私たちは今も富の誘惑と貪欲の偶像と戦っています。富の良き管理者となるためには、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置かなければなりません。私たちに命を与え、すべての必要を与え、永遠のいのちと天国を備えてくださっている神に信頼しなければならないのです。私たちの神への信頼を具体的に表す方法があります。それは聖書が教えているように収入の十分の一を神に献げることです。什一献金とも言われます。

もちろん、献金は規則ではなく、それぞれの自由意思で献げる神への感謝のささげ物ですから、十分の一を献げるのが困難な状況にあれば、神と相談して自分ができる範囲で喜んでささげてよいのです。またもっとささげられる時は十分の一以上ささげていいのです。什一献金には意味があります。それは私たちが十分の一を神にささげる時、すべての物は主のものであるという信仰を告白しているのです。十分の一献金には、十分の十すべてをささげ、神が十分の九を私たちの必要のために戻してくださるという霊的意味があるのです。そして、神が戻してくださった十分の九は神に聖別されたものなので、私たちはそのお金を正しく用いることができます。必要な物を買ひ、必要な蓄えをし、神と人に喜ばれるお金の使い方をすることができるようになります。そして、富に頼らず神に頼って生きる者とされるのです。このように献金は、私たちの信仰にとっての大きな恵みであり、信仰の成長を与える時となります。

「私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き」とⅠテモテ 6:17にあります。神は、私たちがこの世にあっても必要を与え楽しませてくださる神です。この神に望みを置く生き方こそ、むなしい富に望みを置かず、永遠のいのちの祝福にあずかる生き方です。神に望みを置いて日々感謝をもって歩みましょう。

ヤコブ5章7節～11節から「苦難と忍耐」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 農夫の忍耐 7-9

ヤコブはこの手紙の最初に、試練の中にあるクリスチャンに対して忍耐を教えました。1:2-4「私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」そして、手紙が終わりに近づく中で、再び忍耐について教えたのが今日の箇所です。今日の箇所では3つの例を通して忍耐の大切さを教えています。第一は農夫の例です。7-9「ですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、始めの雨や後の雨が降るまで耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。」

ローマ帝国中に離散するクリスチャンたちは、それぞれの地域で様々な試練や苦難にあっていました。そのような中で「いつまでこの苦難が続くのか」という問いが出て来たことでしょう。それに対してヤコブは、「主が来られる時まで耐え忍びなさい」と教えました。「主が来られる時まで」とは、主イエスの再臨の時までと言うことです。この世の試練や苦難は永遠に続くものではありません。やがて主が再び来られる時、神のさばきがなされてすべての悪は終わりを告げます。そして、この世は終わり、永遠の天の御国が始まるのです。ヤコブは「主が来られる時が近づいている」と言い、さらに「さばきを行う方が戸口のところに立っておられます」と言って、その時が間もなく来るので、それまで忍耐するようにと教えました。初代教会においては主の再臨が間もなく来るという緊迫感がありました。それから2千年が経ちました。聖書に「主の前では一日は千年のようであり、千年は一日のようです」とあるように、神と私たちとは時間の感覚が違います。また「主はすべての人が悔い改めに進むことを望んで、再臨の日を忍耐して待っておられる」ともあります。(Ⅱペテロ3:8-9)しかし、主は必ず再びこの世に戻って来られます。その時までには、クリスチャンはこの世で様々な苦難を経験します。そしてそれまでは、主の再臨を待ち望んで忍耐することが大切なのです。

ヤコブは忍耐を教えるために、まず農夫の例を挙げました。イスラエルでは秋の雨とも呼ばれる初めの雨が降る時に、種蒔きをします。雨が降ると種は発芽します。そして、春の雨とも呼ばれる後の雨が降ると、穀物は成長します。そして、その後に収穫を迎えます。農夫は貴重な実りを得るために、秋に降る初めの雨と、春に降る後の雨を忍耐して待つのです。年によっては雨が降り始めるのが遅い時もあります。しかし雨を待たなければ、種蒔きも収穫もできません。農夫は忍耐してその時を待ちます。そして待っている間、畑を耕し、雑草を取り、肥料を蒔き、収穫の喜びの時を待ち望みます。

「さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい」とありますが、人は苦難にあうとつぶやきが多くなり、互いに文句を言い合うことがあります。しかし、農夫にとっては文句を言い合っているのは仕事になりません。農夫には協力が欠かせないのです。人手を必要とする収穫の時は、互いに助け合って収穫します。道具や肥料を融通し合うこともあるでしょう。私たちも兄弟同士でさばき合っているのは、やがて主が来られる時、主によってさばかれてしまします。むしろ互いに助け合い、赦し合い、協力し合うことが大切です。

私たちは霊的農夫です。苦難を通して忍耐すると、私たちは成熟した信仰者の実を結ぶことができます。私たちが忍耐を通して収穫する貴重な成熟の実とは何でしょうか。クリスチャンにとってはガラテヤ5:22-23の御霊の実を上げることができます。ある人は9つの御霊の実を3つずつ分けて説明しています。まず愛、喜び、平安は神との関係における実です。神を愛し、神を喜び、神との平和をもって生きるのです。次の寛容、親切、善意は人との関係における実です。神への愛は人への愛へと広がっていきます。そして、寛容、親切、善意をもって隣人と生きるのです。そして、最後の3つ誠実、柔和、自制は自分自身の中に結ぶ実です。誠実に、柔和が現わす謙遜と優しさを持ち、自制をもって自分を正しく制御して生きるのです。忍耐はそのような実を私達の人生に結ばせてくれます。ですから、忍耐することは豊かな人生の実りとなることを覚えて、主を待ち望みつつ、苦難にあっても忍耐しましょう。

2. 預言者の忍耐 10

忍耐における2つ目の例は預言者たちの忍耐です。10「兄弟たち。苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちを模範にきなさい。」旧約の預言者たちは、主の御名によって語った結果、迫害に会いました。彼らは主に忠実に従った結果、主のことばに聞き従わない人々から迫害を受けたのです。エリヤはバアルの預言者との戦いで勝利し

た後、イゼベルからいのちを狙われました。エレミヤはバビロン捕囚を預言した結果、渴いた井戸に投げ込まれました。エレミヤはその後、エジプトに連れて行かれ、そこで殉教したとされています。ある預言者は王に主のことばを伝えた結果、王の怒りを買って殺されてしまいました。イエスは山上の説教で「義のために迫害されている者は幸いです」と教えた時、「あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです」と言われました。ステパノも「あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が、だれかいたでしょうか」と言って、自ら殉教しました。

預言者たちは苦難の中で忍耐し、主のことばを語り続けました。使徒たちも同じです。彼らの苦難と忍耐から学ぶことは何でしょうか。それは困難の中にも忍耐して主のことばを語り続けることです。Ⅱテモテ 4:2 でパウロはテモテに言いました。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」伝道には忍耐が必要です。なぜならすぐに結果が出ないからです。それは農夫が忍耐して収穫を待つと同じです。忍耐の限りを尽くさないと、伝道はできません。結果は収穫の主におゆだねし、主の救いのみわざを待ち望みつつ、みことばを宣べ伝えることによって、救われる人が必ず起こされます。コロナ禍で今までどおりの伝道ができない中でも、伝道の火を絶やさずに、みことばを宣べ伝えましょう。

3. ヨブの忍耐 11

忍耐における 3 つ目の例はヨブの忍耐です。11「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思います。あなたがたはヨブのことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。」私たちににとってはヨブ記を読むのも忍耐が必要ですが、苦難におけるヨブの忍耐は想像を絶するものです。ヨブは誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れ悪から遠ざかっている人でした。ところがヨブの知らない中で、ヨブの信仰を試すために、神はヨブがサタンに打たれることを許されました。その結果、ヨブはすべての財産と息子 7 人と娘 3 人全員を失い、自らも悪性の腫物で打たれて苦しみました。さらにヨブを慰めようとして来た友人たちから、「あなたが災いにあったのは、あなたが罪を犯したせいだ」と言われて責められます。そのような中で、ヨブは自分の死さえも願って苦しみもだえます。

けれども、ヨブは最後まで神に対する信仰を保って忍耐しました。ヨブ記 13:15-16 でヨブは言います。「見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なお私の道を神の前に主張しよう。神もまた私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、御前に出ることはできない。」また 19:25-26 ではこう言います。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには土のちりの上に立たれることを。私の皮がこのようにはぎとられた後に、私は私の肉から神を見る。」

そして、忍耐の末にヨブが得たものは何だったのでしょうか。それは今まで以上に神を知ったことです。神が嵐の中でヨブに語られた後、ヨブは言いました。42:5-6「私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。」神はヨブを癒され、財産を 2 倍にされ、新たに息子 7 人、娘 3 人が与えられました。それがヨブの忍耐を通して与えられた結末でした。ヨブは苦難を通して「主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられ」ることを知ったのです。

ヨブのような苦難に会う人は、それほど多くないでしょう。けれども、私たちも苦難に会うことがありますし、なぜ苦難に会うのかわからないこともあります。拉致被害者の横田めぐみさんの母、横田早紀江さんは私たちの想像を絶する苦難にあわれました。その苦しみの中で友人から聖書を渡され、ヨブ記を読んだときに、ヨブの苦しみと自分の苦しみ为重なり、それから教会に行き、イエスを信じてクリスチャンになりました。クリスチャンになったからと言って、問題が解決したわけではなく、苦しみは続いています。しかし、慈愛に富み、あわれみに満ちておられる主を信じて、忍耐と希望をもって歩んでおられます。

人生には時には想像を絶する苦難が来ることもあります。しかも、なぜなのかと言う根本的な理由が分からないことがあるのです。しかし、その時、聖書を通して苦難の中に忍耐した人たちの生きざまを知ることによって、慈愛に満ち、あわれみに富んでおられる主を知ることができます。そして、私たちもその主を信じて忍耐して生きていくことができます。「あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。」どんな時にも、主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられることを信じましょう。そして、主を見上げて心を強くしましょう。主が再び来られることを待ち望み、いつ来られても良いように備えましょう。そして主が来られた時に「よくやった。良い忠実なしもべだ」とほめてもらえる生き方をしましょう。

ヤコブ5章12節～15節から「信仰による祈り」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 正直なことば 12

ヤコブの手紙もいよいよ最後のまとめの部分となり、講解説教も今日を入れて後2回となりました。ヤコブは12節で偽りの誓いを取り上げ、偽りの誓いを止めるようにと教えました。12「私の兄弟たち。とりわけ、誓うことはやめなさい。天にかけても地にかけても、ほかの何にかけても誓ってはいけません。あなたがたの「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさい。そうすれば、さばきにあうことはありません。」偽りの誓いを止めるようにというヤコブの教えは、マタイ5章や18章のイエスの教えと同じ教えです。今日の私たちにとっては特別な時以外に誓うことはありません。教会では教師になる時の誓約や洗礼式や転入会式での誓約、また結婚式での誓約などがありますが、これらの誓約は特別重要な神と人の前での約束です。聖書はこのような特別な誓いを否定しているわけではありません。聖書がしてはいけないうと教えている誓いとは、普段の会話の中で誓いを連発することです。当時はそのような習慣がユダヤだけでなく、ローマ帝国中に広がっていたのです。

そして、クリスチャンは「主の名をみだりに口にしてはならない」という第4戒の教えがあるので、神にかけて誓うことはせず、天や地にかけて誓うことが行われていたのです。しかし、イエスはマタイ5章で「天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。」と教えられました。またマタイ18章では、ユダヤ人は「神殿の黄金にかけて誓えば、果たす義務があるが、神殿にかけて誓えば、何の義務もない」また「祭壇のささげ物にかけて誓えば、果たす義務があるが、祭壇にかけて誓えば、何の義務もない」と言って、誠実な誓いを行っていませんでした。イエスはそれらの偽善の誓いを戒められました。

ヤコブは3章で、ことばの罪について教えました。不誠実で偽善的な誓いも、神のさばきを受けることばの罪であることを教え、このような誓いをやめるようにと教えました。「とりわけ」と言っているのです。間違った誓いの習慣がクリスチャンにもかなり入っていたのです。

ヤコブはこのような偽りの誓いを止めるとともに、クリスチャンとしての正しい言葉の使い方を教えました。それはイエスがマタイ5章で教えられたことと同じことです。「あなたがたの「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさい。」これはどういう意味でしょうか。それはまず通常の会話においては誓いをしないことです。次に、誓わなくても正直に真実を語ることです。「はい」を「いいえ」、「いいえ」を「はい」と言えようそをつくことになります。そうであってはいけないということです。嘘はつかず、正直に真実を語ることです。

たとえ人前で私たちの嘘がばれなくても、神はすべてを見ておられます。ですから、私たちは神の前で正直であるべきです。自分が語る言葉を神は聞いておられることを意識すれば、人の前でも正直に話す者となるでしょう。ヤコブは「信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです」と教えました。私たちの行いもことばも神に対する信仰から出てくれば、おのずと良い行い、正直なことばとなって出てきます。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさい。「はい」を「いいえ」、「いいえ」を「はい」と言ってはいけません。神の前で、信仰によって正直な言葉を語る者となりましょう。

2. 祈りと賛美 13

13節は、苦しんでいる人と喜んでいる人に対する教えです。13「あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。」ローマ帝国中に離散していたクリスチャンの中には苦しんでいる人がたくさんいたことでしょう。13節の「苦しむ」の名詞形が10節の「苦難」です。クリスチャンには様々な苦難が襲ってきました。信仰ゆえの迫害がありました。経済的な困難もありました。精神的な苦しみやこの後に出て来る病気による肉体的苦しみもありました。10節では苦難における忍耐が教えられましたが、13節は苦難の中で忍耐する秘訣が祈りであることを教えています。1テサロニケ5:17で「絶えず祈りなさい」とありますが、特に苦しんでいる時には神に祈ることが大切です。

私たちが苦しんでいる時に神に祈らないとどうなるのでしょうか。それは、私たちは苦しいことばかりを見て、心配し、不安になり、あるいは不平不満を言ったりするようになります。イスラエルの民がエジプトを脱出して喜んだのもつかの間、水や食べ物が不足して苦しむと、途端に不平不満を言ってつぶやきました。約束の地を偵察した人々が、そこには強い民が住んでいると報告すると、人々はモーセを殺して別のリーダーを立ててエジプトに帰ろうと言いました。

そのような時、モーセはどうしたでしょうか。彼は神に祈りました。そして、神はモーセにどうすればよいかを語られました。モーセは苦難の中で神に助けを求め、神の助けをいただいて40年間の荒野の旅を歩み続けることができたのです。詩篇 50:15 にはこうあります。「苦難の日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出し、あなたは私をあがめる。」

ヤコブは喜んでいる人に対しても語りました。「喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。」神を賛美することも祈りです。ヤコブは喜びの時には、神への賛美の祈りをささげよと教えているのです。私たちが喜ぶ事柄にのみ心を留めるとどうなるでしょうか。よかった、うれしいという感情だけで終わってしまい、神への感謝を忘れてしまいます。或いは、この良い出来事は自分が頑張ったからできたのだと自分を誇り、高慢になる危険性さえあります。そうならないために、喜びの時には神への賛美をささげるのです。「主はすばらしい、主はすばらしい、主はすばらしい、私の主」と賛美すれば、この喜びを与えてくださった神をほめたたえ、神に感謝することができます。そして神の前に謙遜に歩むことができます。苦難の時も喜びの時も神に祈るならば、神の助けと神への感謝が与えられます。それがクリスチャンの生き方なのです。

3. 信仰による祈り 14-15

14-15 節は病気の人への祈りの勧めです。14「あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。」私たちはからだの調子が悪かったり、病気になった時には必要に応じて薬を飲んだり、あるいは病院に行って治療をしてもらいます。さらにクリスチャンは神に病気を癒してくださいと祈ります。なぜなら、癒しは神のわざであり、神の御手の中に私たちの健康もいのちもあることを知っているからです。14 節で「教会の長老たちを招き」とあるのは、重い症状になれば、個人的な祈りだけでなく、教會的な祈りをしてもらうようにということです。教会の祈りの課題として皆に祈ってもらうとともに、長老たちを招いて祈ってもらいなさいと勧めているのです。聖書における長老は、監督や牧師とも呼ばれています。さらにここでは祈り手として成熟した信仰を持つ教会のリーダーも含まれます。「オリーブ油を塗って」とは聖書時代、油を塗って祈るという習慣があったからです。しかし、聖書を見ると、イエスは必ずしも油を塗って祈られませんでしたし、この箇所でも祈りの方法ではなく祈ることが中心に教えられています。ですから、今日では油を塗って祈ることはあまりありません。

15「信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がらせてくださいます。もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。」苦しい時の神頼みということわざがありますが、クリスチャンの祈りはそのような祈りではなく、信仰による祈りです。それは主イエスの十字架の贖いを信じて罪を赦され、神の子どもとして父なる神を心から信じる者の祈りです。病もいのちも神の御手にあり、病の癒しを祈るとともに、神の最善のみこころにすべてをゆだねる祈りです。

「病んでいる人を救います」とあります。私たちは祈っても病が癒されずに、天に召されるという経験をします。そのような時、祈りは聞かれなかったのでしょうか。あるいは、私たちの信仰が足りなかったからいやされなかったのでしょうか。そうではありません。聖書は祈れば必ず病気は治るとは教えていません。では私たちは病の時になぜ祈るのでしょうか。病める人のためになぜ祈るのでしょうか。「信仰による祈りは、病んでいる人を救います」とはどのような意味でしょうか。聖書の救いは全人格的なものです。ですから神は病める人の全人格的な救いを願っておられます。まずたましいの救いがあります。祈りを通して、クリスチャンはイエスの十字架の贖いと永遠のいのちを与えられていることを確認し、自分のたましいの救いを再確認することができます。そして主がいつもともにいて助けてくださっていること、天の国籍を持つ者として、たとえ癒されなくてもイエスのおられる天国に行くことができるという確信と希望を持つことができます。未信者であれば病気を通して、イエスを信じて救いに導かれる機会となることができます。

また精神的にも不安や落ち込んだ状態から、祈りのとりなしによって励まされ、主にある希望をもって精神的に立ち上がることができます。さらに、肉体的にも祈りに励まされ、病気を受け入れ、病気と向き合って日々を歩むことができます。そして、主のみこころならば肉体的にも回復することができます。「もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます」とありますが、病気を通して私たちは罪を示されることがあります。そのような時、私達は罪の悔い改めをして、主の赦しを確信し、平安に過ごすことができます。ですから「信仰による祈りは、病んでいる人を救います」というみことばは真実なのです。私たちはどんな時にも主に祈りましょう。苦しんでいる時も、喜んでいても、病の時にも祈りが必要です。一人で祈り、家族で祈り、友人で祈り、そして必要な時には教会に祈りをお願いしましょう。教会では牧師も信徒もその人のために祈ります。神は私たちの信仰による祈りに答えてくださるお方です。

ヤコブ5章16節～20節から「祈りの力」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 祈りの力 16

4月から始まったヤコブの手紙の講解説教も今日が最後となりました。今日の箇所は先週に続いて祈りがテーマです。クリスチャンは苦しい時に祈り、喜びの時は賛美をもって祈り、病の人のためにとりなし祈ります。そして16節は互いのための祈りを教えています。16「ですから、あなたがたは癒されるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります。」

まず、ここでの祈りの目的が「癒されるために」です。癒しと言う言葉は、聖書では病の癒しだけでなく、たましいの癒しを教えています。Ⅰペテロ2:24にはこうあります。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえにあなたがたは癒された。」キリストの打ち傷による癒しとは、私たちの罪の赦しであり、神の救いのことです。先週学んだ15節には「信仰による祈りは、病んでいる人を救います」とありました。ここでの救いも、肉体の癒しだけでなく、霊的な癒しを含めて全人格的な救いであることを見ましたが、16節の癒しは15節の救いと同じ意味に使われています。

16節で問題になるのが「互いの罪を言い表し」という意味です。ある人は、この箇所からクリスチャンは互いに罪を告白し合うことが大切だと教え、罪を告白し合う集まりを持とうとします。しかし、聖書は必ずしもそのような集まりや方法を持つことを教えてはいません。個人的な罪は個人的に神に告白して、赦しを得ればよいのです。Ⅰヨハネ1:9にはこうあります。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」罪の告白そのものが、悔い改めの祈りです。神は私たちの個人的な悔い改めの祈りを聞いて、私たちの罪を赦したましいの癒しを与えてくださいます。教会での公けな罪は公けに告白し、謝罪する必要がある場合もあるでしょう。その時は教会の交わりの中でその人のために祈り、その人のたましいの癒しを祈ります。

ある場合は、個人的な罪の告白を助けるために、「神の前に伝えるべきことはありませんか」と聞いてあげる場合もあるでしょう。以前テレビでアメリカの映画を見ていた時、入院患者が危篤になり、牧師が呼ばれました。その時、牧師は患者に「神に告白すべき罪はありませんか」と聞きました。アメリカの牧師はこのように対応するのかとその時思いました。罪の重荷を抱えて死を迎えることがないように、神に罪を告白し、キリストの赦しを得て、平安のうちに天国に行くことができるためのたましいの牧会をしたのです。また、この聖書のことばが一番適用できるのが、人間関係において和解をする時です。互いに罪を認め、互いに罪を言い表し、互いのために祈るなら、それぞれの罪が赦され、人間関係が癒され和解できます。どんな状況にあっても、罪の悔い改めをすれば、個人的にもたましいが癒され、人間関係にも癒しが与えられ、神と人との平和をもって生きることができるのです。

また、16節が強調することは互いのために祈ることです。神は互いのための祈りを用いてくださいます。互いの祈りの課題を覚えて祈り合うのです。14節では重い病になった時には教会の長老たちを招いて、教会的な祈りをお願いすることが教えられました。コロナ下で互いに向きあって祈ることが難しい状況にありますが、一人でも互いのために祈ることができます。祈禱会でも互いのための祈りをしています。互いに祈り合うことは互いに助け合うことなのです。

さらに「正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります」とあります。正しい人とは、信仰によって義と認められた人のことです。自分の罪を神の前に悔い改め、イエスを自分の救い主と信じて、罪が赦された人のことです。悔い改めの祈りは罪の赦しとたましいの癒しを与えるという大きな力があります。そして、悔い改めて神の前に義と認められた正しい人の祈りは、働くとき大きな力があるのです。それなのに、私たちはこの祈りの力を忘れて、祈らずに自分の力で解決しようと右往左往します。自分で行うことは決して悪いことではありませんが、祈らずに自分の力で行うことは、神の力と助けを自ら拒む愚かな行為です。詩篇46篇に「神はわれらの避け所また力。苦しむときそこにある強き助け」とありますが、その神の力と強き助けをいただく方法が祈りです。ですから、どんな時にも主の助けを求めて祈り、互いのために祈る者となりましょう。

2. 熱心な祈り 17-18

17-18節は祈りの力の例として、エリヤの祈りをあげています。17-18「エリヤは私たちと同じ人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、3年6カ月の間、雨は地に降りませんでした。それから彼は再び祈りました。すると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。」これはⅠ列王記17-18章の出来事です。イスラエルの王アハブと王妃イゼベルはイスラエルに偶像礼拝を広めました。主なる神はイスラエルをさばくために預言者エリヤの祈りを用いて3年6カ月雨が降らないようにしました。そして、カルメル山でエリヤはバアルの預言者と対決し、エリヤの築いた祭壇に火が降り、主なる神がまことの神であることが証明されました。その後、エリヤが祈ると雨が降ったのです。これは旧約聖

書の中でも特別な奇跡でした。しかしヤコブは、エリヤは決して特別な人ではなく、私たちと同じ人間だったと教えます。実際、エリヤはこの奇跡の後、イゼベルにいのちをねらわれ、燃え尽き症候群になって「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください」と弱音を吐きました。エリヤは特別強い人ではなく、私たちと同じ人間だったのです。

ではそのエリヤの祈りがなぜ大きな力を発揮したのでしょうか。それはまずエリヤの祈りは正しい人の祈りだったからです。神の前に義と認められ、神との関係が正しい人だったので、「正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります」ということが実際に起こったのです。もう一つのエリヤの祈りの力の秘訣は、熱心な祈りでした。「エリヤは私たちと同じ人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、3年6カ月の間、雨は地に降りませんでした。」「熱心に祈る」はギリシャ語聖書では「祈りの中で祈る」という言葉です。それが熱心に祈るという意味になります。この表現から私たちの祈りはどうかと点検することができます。私たちも祈ります。祈りの時を持っています。けれどもその祈りがともすれば、習慣的、表面的、通り一遍なものとなり、真剣に神に向き合って神に求めるという祈りに欠けることがあるのではないのでしょうか。そうであれば、祈りの中で祈っていない、即ち熱心に祈っていないことになります。エリヤの祈りから教えられることは熱心な祈りです。神に真剣に向き合い、敵である悪魔を意識し、神のみこころを求め、神の力と助けを熱心に祈る祈りです。そのような祈りをすれば、私たちの祈りも大きな力を発揮します。もちろん、祈りの答えは神のみこころの中にあるので、私たちが祈った通りになるわけではありませんが、神は私たちの祈りを用いて大きなみわざをなしてくださいます。

3. 祈りの実践 19-20

19-20には祈りという言葉は出て来ませんが、祈りの実践が教えられています。それは信仰から離れた人を連れ戻すための祈りと実践です。19-20「私の兄弟たち。あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すなら、罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになるのだと、知るべきです。」洗礼を受けた人が、途中で教会から離れてしまうことは今も昔も大きな課題です。イエスを信じて救われた人は、その救いは永遠になくなることはないので、たとえ教会から離れていてもその人は救われています。一方、ある人たちは洗礼を受けたけれども、表面的な信仰理解にとどまっていて、救われていない、新生していない場合もあるのです。欧米では赤ちゃんの時に幼児洗礼を受けたけれども、その後教会から離れる人も多くいます。ですから、新生したクリスチャンかどうかを確かめるために、「あなたは新生したクリスチャンですか」と質問することがあります。20節に「罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し」とあります。ですから、19節の「真理から迷い出た人」とはまだ救われていない人であることが分かります。その人がまだ救われていないので、そのままでは永遠の死に至る、だから救い出す必要があると言っているのです。

一方、信仰を持ち救われてはいるけれども、いろいろな理由で、今教会に行っていない人たちもいます。特に、教会の問題で行きたくても行けなくなってしまった場合、そのような人は苦しみの中に過ごしておられます。そのような場合は、クリスチャンの友が適切な助けを差し伸べ、祈り支える必要があります。また教会の問題を解決し、その人たちが教会に復帰できるようにしなければなりません。ある場合は、別の教会に導かれることを通して、信仰生活を回復する場合もあるでしょう

また、教会からも信仰からも離れている人もいます。私たちはそのような人たちのことも覚えて祈る必要があります。そして、イエスのもとに、そして教会に戻るために助けの手を差し伸べることができれば、その人にとっても、教会にとってもどんなに幸いでしょうか。信仰に戻り、教会に戻るにもそれぞれに時があるでしょう。ある人は、高齢になり、社会的なしがらみがなくなった時、神と再び向き合う備えができて、信仰に戻ることがあるでしょう。別の人は、試練に会い、その結果神を求めるようになって、再び信仰に戻る場合もあるでしょう。またある人は、人から誘われて、再び教会に行く人もいます。そのような人の手助けをするためには、祈りが必要です。主は私たちの祈りを用いて、ご自身のみわざをなしてくださいます。

ヤコブの手紙は、信仰と行いの一致を大切なテーマとして教えました。行いのない信仰は死んでいると言って、行いを伴う信仰を持つようにと教えました。そして、最後の箇所では信仰による祈りを教えました。祈りのない信仰は死んでいるのです。反対に祈りのある信仰は生きていて、大きな力を発揮します。実際に何をするにも祈らなければ、私たちの行いに力が与えられません。主が来られる時が近づいているこの時、私たちは真剣に熱心に神に祈りましょう。苦難の時も喜びの時も祈りましょう。病める人のために、困難な状況にある人のために、教会から離れている人のために祈りましょう。そして、祈りの力を自らいただき、必要な助けを与える人となりましょう。